

## 《史料紹介》

岡山藩池田家文庫

# 「天保五甲午年江戸御国状留」

岡山藩研究会分科会

「岡山藩と幕府・朝廷・諸藩」

本稿で紹介する「天保五甲午年江戸御国状留」は、岡山藩池田家文庫に収められている一史料である。周知のように、岡山藩池田家文庫は、旧岡山藩の藩政史料を中心とする六万点にもものぼる膨大な史料群で、現在岡山大学附属図書館に所蔵されている。質の高い藩政史料の一つとして有名で、この史料を駆使して谷口澄夫『岡山藩政史の研究』<sup>(1)</sup>がまとめられている。この池田家文庫のうち、藩政史料部分が一九九二年にマイクロ化され学界に提供された。<sup>(2)</sup>

早稲田大学図書館は、この『マイクロ版集成』を購入して研究者・学生の利用に供しているが、そのような動きを背景として学内外の研究者が集まり早稲田大学文学部教授深谷克己を代表として岡山藩研究会を組織し、『マイクロ版集成』を活用して研究を進めている。今回の史料紹介も、同研究会の分科会「岡山藩と幕府・朝廷・諸藩」の一九九四年度活動の成果の一斑である。<sup>(3)</sup>

当分科会では、藩政の動向を国許（岡山）だけで、あるいは江戸だけで見るのではなく、江戸・上方（大坂・京

都）・国許の三極構造の中で捉えるべきであるとの議論を踏まえ、一九九四年度活動として大坂に焦点を絞り、大坂留守居作成文書を講読し考察を加えた。

## 二

諸藩は大坂に蔵屋敷を設け、蔵役人を置いた。その重役が留守居で、蔵屋敷の業務全般を統括するとともに、対外折衝にあたったとされる。<sup>(4)</sup>したがって、諸藩における大坂の機能については、蔵屋敷の業務の解明に重点が置かれ、とりわけ蔵屋敷を通しての年貢米の売却や金融資本からの藩財政資金の調達という観点から研究が進められてきた。<sup>(5)</sup>後述するように、大坂留守居の職掌は多岐にわたっており、年貢米の売却や金融資本との交渉のみで蔵屋敷の役割、諸藩にとっての大坂の位置を論ずることは、やや一面的に過ぎるくらいがあると思われる。従来顧みられることがなかった蔵屋敷の諸機能、留守居の諸職掌を明らかにしていく必要がある。本史料の翻刻も、そのような研究上の意義に応える一作業である。

## 三

岡山藩蔵屋敷は寛永一八年（一六四二）中之島築嶋町に設けられたという。その後、同屋敷は拡大し、延宝頃には築嶋町と久保嶋町までまたがるようになった。このほかにも屋敷を設けており、延享三年（一七四六）には中之嶋築嶋町・久保嶋町屋敷、天満堀川屋敷、新堂島屋敷の三ヶ所であった。<sup>(6)</sup>

岡山藩では、蔵屋敷に大坂留守居、大坂定目付、判形などの蔵役人を置いた。大坂留守居は、諸藩の留守居との様々な事柄についての折衝や、大坂城代・大坂町奉行など幕府役人との交渉、鴻池善右衛門を始めとする金融資本と

の交流・交渉を担当した。<sup>(7)</sup>寛文以前から置かれ、人数は一名で平士から任じられた。<sup>(8)</sup>天保五年（一八三四）の大坂留守居は高尾助太で一〇〇石取の平士であつた。大坂定目付は元禄元年（一六八八）から名が見え、天保五年には士鉄砲の佐藤孫兵衛であつた。大坂留守居・大坂定目付は中之嶋屋敷にいたと考えられている。

蔵物の出納を司る蔵元は、初めは蔵役人が勤めていたが、寛文期頃からだいたい町人に任せるようになり、藩から扶持米が給せられた。延宝七年（一六七九）頃には思案橋浜の天野屋利兵衛、天神橋筋の倉橋屋勘三郎の名が知られる。その後、天満屋久兵衛や倉橋屋庄兵衛・藤四郎などがなり、寛保元年（一七四一）以降鴻池善右衛門であつた。<sup>(9)</sup>また、蔵物の代金を収納して江戸・国許に送金する業務を行つた掛屋には、延宝七年頃には鴻池善右衛門の名が、<sup>(10)</sup>元禄一〇年（一六九七）には吉文字屋善五郎の名が知られる。<sup>(11)</sup>

#### 四

岡山藩大坂留守居の作成文書は数多く残っているが、主なものは別表の通りである。<sup>(12)</sup>

- ① 「御書御使者留」は岡山藩が他家に使者をしたことを書き留めたもの。
- ② 「御分家様御書留」は岡山藩の支藩（分家）が他家に使者をしたことを記し留めたもので、支藩が大坂屋敷を設けなかつたため、本家である岡山藩の蔵屋敷から他家へ使者を出したと考えられる。
- ③ 「江戸御国状留」は大坂留守居から国許および江戸に出した書状を記し留めたもの。
- ④ 「大坂地向状留」は他藩留守居や鴻池善右衛門などの商人に宛てて出した書状を書き留めたもの。
- ⑤ 「廻状留」は大坂にある諸藩の留守居組合の廻状を書き留めたもの。
- ⑥ 「永代記録」は大坂留守居が留守居の職務に関する事がらを記録したもの。

⑦「大坂町触留」は大坂町奉行所から大坂の町に出された触を書き留めたもの。

⑧「訴状留」は岡山藩に関わる訴訟の記録である。

大坂留守居が果たした機能、国許と江戸と大坂との関係を考察するためには、右に述べた各種の史料を有機的に結び付けて分析することが必要である。したがって、分析時期選定にあたっては、これらの史料が揃っていることが望ましく、特に、「江戸御国状留」「大坂地向状留」「廻状留」の相互活用が有効であろうと推測された。天保五年（一八三四）を選んだのは、このような理由による。

## 五

右に記したように、「江戸御国状留」は大坂留守居から国許および江戸に出した書状を記し留めたものであるが、天保五年のものには一三通が収められている。江戸に宛てたものは一通しか記されておらず、圧倒的に国許へのものが多い。天保五年の「江戸御国状留」<sup>(13)</sup>が、国許や江戸に出した書状全てを書き留めたものであるかどうかは明らかではないが、その大半と見てよいのではないだろうか。宛先別に多い方から見ると、作廻方<sup>(14)</sup>二一通、小仕置<sup>(15)</sup>一三通、郡奉行一三通、船作事奉行八通となる。用件により宛所が異なっているわけだが、特定の役職に集中することなく、比較的分散していることが特徴として理解される。大坂留守居の職掌が多様であることの反映であろう。

書状の内容も多岐にわたり、岡山藩の大坂詰夫の帰国に関するもの、代金滞納により岡山藩領民が訴えられた訴訟に関するもの、他藩領において岡山藩領民が死亡したことによる遺子の受取りに関するもの、岡山藩蔵元・掛屋の鴻池善右衛門や近江屋久右衛門などの大坂商人への季節の付届けに関するもの、等々である。詳しくは、本稿を読んでいただきたいが、大坂留守居の多様な側面を理解することができよう。



なお、本稿作成にあたっては、早稲田大学中央図書館映像資料課マイクロ資料室に配架された『マイクロ版集成』を用いた(史料番号A1423/フィルム番号TA414)。利用にあたっては、種々御高配をいただきました。同室に御礼申し上げます。  
一九九四年度分科会活動は、泉正人・大森映子・久保貴子・谷口眞子・永嶺信孝・針谷武志が行った。(文責…泉)

# 註

- (1) 谷口澄夫『岡山藩政史の研究』(塙書房、一九六四年)。
- (2) 『岡山藩池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』(丸善、一九九二年)。以下『マイクロ版集成』と略記する。
- (3) 岡山藩研究会の組織化の経緯および活動記録については、泉正人『岡山藩研究会について』(『岡山地方史研究』第七四号一九九四年)、『岡山藩研究』第一号(一九九三年)と第二〇号(一九九六年)を御参照いただきたい。
- (4) 「蔵屋敷」(『国史大事典』吉川弘文館)。
- (5) 宮本又次の一連の研究(近世初期の大阪における米穀流通)「大阪の蔵屋敷と蔵元および掛屋」(『大阪の蔵屋敷と名代』「大阪の蔵屋敷と御館入」)「加賀藩蔵屋敷払米制度に関する史料紹介」、いずれも同氏編『大阪の研究』4(清文堂出版、一九七〇年)所収、森泰博「府内藩大坂蔵屋敷の業務」(『大阪の歴史』第二五号、一九八八年)など。
- (6) 宮本又次「大阪の岡山藩の蔵屋敷史料の紹介」(宮本又次編『大阪の研究』2(清文堂出版、一九六八年))。
- (7) 同右論文。
- (8) 平士は岡山藩内の格式。家老・番頭・物頭・頭分・組頭・平士・士鉄砲・徒・輕輩・足輕の格式があった(谷口澄夫前掲書、一二二頁)。
- (9) 註(6)論文。
- (10) 註(6)論文。
- (11) 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』(大阪市、一九八九年)四七五頁。
- (12) 岡山大学附属図書館編『池田家文庫マイクロ版史料目録』総記(丸善、一九九二年)・法制(同、一九九三年)。
- (13) 池田家文庫「天保五甲午年江戸御国状留」(史料番号A1423/『マイクロ版集成』フィルム番号TA414)。

(14) 作廻方は、元禄一〇年(一六九七)に初めて置かれ、財政全般を司る。物頭格から任じられ、一―三名(谷口澄夫前掲書、二一〇頁)。

(15) 小仕置は、延宝四年(一六七六)に初めて置かれ、仕置きを助けて政務を行う。番頭格から任じられ、三―五名(谷口澄夫前掲書、二一〇頁)。

《別表》 岡山藩大坂関係史料一覧

	御書御 使者留	御分家様 御書留	江戸御 国状留	大坂地向 状留	廻状留	永代記録	大坂町 触留	訴状留
安永 3年 (1774)		1. —						
4年	○							
6年	○	○						
7年	1~11.							
10年	○							
天明 4年 (1784)	○							
5年	○							
7年	1~10.	12. —						
		12. —						
8年	○							
9年	○	○						
寛政 3年 (1791)	○							
4年	1~9.	3. —				12. —		1.
5年		1. —						
6年								1.
7年	○					○		
8年	○							
11年	○	○						
享和 1年 (1801)						12. —		
2年	○					1. —		
3年	○							
4年	○	9. —						
文化 2年 (1805)	○					○		

	御書御 使者留	御分家様 御 書 留	江戸御 国状留	大坂地向 状 留	廻状留	永代記録	大坂町 触 留	訴状留
文化 5年	○					○		
6年	○							
8年	○							
9年								1.
10年								1.
11年	○		○	○		7. —		○
12年			○	○		4. —		○
								1.・4.
13年	○		○					
14年	○		○	○				
15年			○	○				
文政 2年 (1819)			○	○				
3年	○		○	○		○		
4年	○		○	○				
5年	○		○					
6年	○		○	○				
7年	○	1. —	○	○				8. 改
8年	○			○				
9年	○			○		3. —		
10年	○							
11年			○					
12年	○	○	○					
13年	○			○				
天保 2年 (1831)			○	○				
3年			○	○				



刻翻  
天保五甲午年江戸御国状留

	御書御 使者留	御分家様 御書留	江戸御 国状留	大坂地向 状留	廻状留	永代記録	大坂町 触留	訴状留
天保 4年	○				4. ~ 12.	9. —	1.	
5年	○	10. —	○	○	○		1.	
6年	○	1. —	○	○				
7年	○		○	○				
8年	○		○		1. ~ 8.		1. · 5.	
9年	○						1 ~ 9.	
10年	○			○				
11年	○						1.	
12年	○	○			○	○		
13年	1 ~ 9.			○	4. ~ 12.		7.	
14年	○		○	○			○	
15年	○		○					
弘化 2年 (1845)					○			
3年			○	○			○	
4年	○							
嘉永 1年 (1848)		4. —	○		○			
2年					○	3. —	○	
		○				3. —		
3年					○	1. —	○	
4年			○		○		○	
5年					○			
6年							○	
7年					○			
安政 2年 (1855)					○		○	

— 西

	御書御 使者留	御分家様 御 書 留	江戸御 国状留	大坂地向 状 留	廻状留	永代記録	大坂町 触 留	訴状留
安政 3年							○	—
5年			○		○		○	
6年					○		○	
7年			○				○	
万延 2年 (1861)			○		○		○	
文久 2年 (1862)			○					
3年					○			
元治 1年 (1864)								東・西
2年					○			
慶応 3年 (1867)			○		○		○	
4年	1～9.			○			○	

註：岡山大学附属図書館編『池田家文庫マイクロ版史料目録』総記（丸善，1992年）・  
『同』法制（同，1993年）から作成。

○印はその年の史料があることを意味する。数字は月。～および—は期間を表す。  
「訴状留」欄の「東」「西」は，訴訟を扱った大坂町奉行所の別。

## 【凡例】

一、書状には便宜上通し番号を付し、書状と書状の間は一行空けた。

一、漢字は原則として常用漢字を用いた。ただし、原本の漢字で常用漢字にないもの、および特にその必要を認めたものについては原本のままとした。

一、変体仮名は現在用いられている仮名に改めたが、「江」「茂」「者」「而」「而已」はそのままとした。

一、つくり字、合字は「ㄅ」以外は仮名にした。

一、繰り返し記号は、「々」（漢字）、「ゝ」（平仮名）、「ゝ」（片仮名）。

一、敬字のための闕字は全て一文字空け、平出は改行、台頭は一字上げとした。

一、原本にある抹消は、左側にささぎを付すか、その箇所を「」でかこみ、右肩に（抹消）と注記した。

一、人名は、岡山藩士については判明する範囲で末尾にまとめて注記し、大坂の商人については特に注記をせず、その他については必要に応じて傍注を付した。

一、地名は、末尾に一括して注記し、現在の行政区域、村高（天保郷帳）等を記した。

【翻刻】

(表紙)

天保五年甲午年

江戸  
御国 状 留

高尾

礼罷出申候、尤同人取片付用意次第出立罷帰候様可仕旨、  
是亦承知仕、此旨相心得させ申候、右貴答為可申上如斯  
御座候、恐惶謹言

正月元日

佐藤孫兵衛

高尾助太

岩田七郎兵衛様

【1】

改年之御吉慶不可有休期御座候、上々様益御機嫌能被為  
遊 御迎陽恐悦至極奉存候、然者旧臘廿八日之貴書相達  
拝見仕、則左之通

十二月廿八日

御作廻方

大坂定目付下代大森栄次郎義、年来無懈怠相勤候付、

御切米拾五代式人御扶持被下、御作廻方支配輕輩ニ被

成、網浜水門番被仰付候、此旨可申渡候

右御用老被仰渡、小仕置大御目付出座

(池田主税)

右之通主税殿被仰渡候付、栄次郎へ可申渡旨御紙表之趣

承知仕候、則今元日申渡候処、難有仕合奉存候、猶為御

【2】

奉別啓候、弥御勇健被成御超歳重量目出度御儀奉存候、  
然者大森栄次郎義兼々御歎申上置候処、誠ニ此度結構之  
御場所へ御振向被成下、於私共も難有仕合奉存候、右御  
礼申上度奉存候、以上

正月元日

佐藤孫兵衛

高尾助太

(岩田)  
七郎兵衛様

【3】

一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、



然者旧冬の登坂仕居申候東中嶋町福岡屋長兵衛義、段々願人へ及対談候得共、落合不申、依之付添人罷登候様同人の御地町役人共へ申遣し、則願出候処、私御文通不申上候而ハ御聞届無之由、町役人共申来候旨、別紙之通長兵衛申出候間、右付添人急々罷登候様御計らせ可被成下候、右為可得貴意如斯御座候、恐惶謹言

正月十六日

高尾助太

舟戸彈之丞様

【4】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者左之通

一紙包箱式ッ

(鹿兒島藩主島津齊興)

右薩州様当所御屋敷の到来仕候ニ付、則指下し申候間、宜様奉願上候、右為可得貴意如斯御座候、恐惶謹言

正月十八日

高尾助太

伊東佐兵衛様

森清助様

【5】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者別封屯通土佐御屋敷の到来仕候ニ付、則差上申候、御落手可被下候、右為可申上如斯御座候、恐惶謹言

正月廿日

高尾助太

山脇兵作様

【6】

去ル十六日之貴書相達拝見仕候、愈御勇健被成御座目出度御儀奉存候、

一鳥目五百文 鴻池善右衛門飛脚之者へ

右者年始為御祝儀善右衛門父子并善兵衛の以飛脚扇子一箱充指上候付被下候間、於当地用意仕指遣し可申旨、御紙上之趣承畏仕、則取計相渡申候、右御請答為可申上如此御座候、恐惶謹言

正月廿日

高尾助太

(宮城) 舍人様

(山脇) 兵作様

猶以右飛脚之者指上之品、指置帰候付、本文之趣被御下候間、承知仕候、以上

【7】

去ル廿二日之貴札相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者鴻池善右衛門并近江屋久右衛門へ生白魚式籠ツ、例年之通被遣候付、私共江試として小籠一御指添昨廿四日相達早速試候処、風味宜御座候ニ付、御添翰共指遣し申候処、則兩人へ返翰指越候ニ付、指下し申候、御落手可被成下候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

正月廿五日

佐藤孫兵衛

高尾助太

岩田七郎兵衛様

【8】

去ル廿二日之御祝書相達致拝見候、弥御堅固被成御越年奉珍重候、然者御作廻方々例年之通鴻池善右衛門・近

江屋久左衛門<sup>(マ)</sup>江生白魚二籠宛被遣候ニ付、青目籠入四ツ外ニ小籠壹ツ試之分共、何れも御封印御認メ午中刻出、<sup>(4)</sup>二日切態飛脚ヲ以御差し越、昨廿四日相達申候、風味之上毎之通宜取計可申旨御紙面之趣致承知候、早々取計相済申候、右御意迄如斯御座候、恐惶謹言

正月廿五日

佐藤孫兵衛

高尾助太

遠藤五左衛門様

猶以、御作廻方々之状箱式つ封状壹通落手いたし候、外ニ雨用意品ハ飛脚者へ差帰し申候、已上

【9】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者当地詰御掃除小人御野郡宿村作太夫義、去ル寅年々当地相詰、母老年ニ及候ニ付、為見廻御国へ立帰罷下度由、松本槌之介々別紙口上書を以願出候間、承届差下し申候、此段御聞置可被成下候、右為可申上如此御座候、恐惶謹言

二月朔日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

立歸り御国許江罷下り申度旨願出申候、此段宜御尊被  
成下候様申上度奉存候、已上

上嶋彦兵衛様

午正月

松本槌之介

高尾助太様

【10】

一筆啓上いたし候、弥御健安被成御勤珍重存候、然者当地詰御掃除小人御野郡宿村作太夫義、去ル寅年々当地ニ相詰、母老年ニ及候間、為見廻御国へ立歸罷下度由願出候ニ付、承届差下シ申候、此段判形中へも申達置候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

二月朔日

高尾助太

尚々今日乗船仕罷下候間、左様御承知置被下宜御願申上候、以上

口上之覚

御野郡宿村  
大坂詰掃除御小人

作太夫

右之者、去ル寅年々相詰居申候、此度宿許老母為見廻

【11】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者去月廿九日矢部駿河守殿御役所へ御呼出ニ付、罷出候処、当地橋通八町目嶋屋孫兵衛（大坂西町奉行矢部定謙）の児嶋郡阿津村和平相手取証文銀滯出入式ケ度目訴状相渡り候ニ付、同人呼寄申渡候処、

旧冬々度々願人へ及懸合候得共、兎角対談行届不申候由、且和平名前當時阿津村ニ無御座、右始末別紙之通申出候間、則尅通致進達候、弥右之通相違無御座候哉御尋申候、御糺被成否被仰越可被下候、其上ニ而御奉行所へ御届可申上、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

二月三日

高尾助太

吉田勘左衛門様

【12】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、  
然者別封壹通宇和嶋御屋敷へ到来仕候ニ付、則指上申候、  
御落手可被成下候、右為可得貴意如斯御座候、恐惶謹言

二月三日

高尾助太

山脇兵作様

【13】

去ル朔日之貴書相達拝見仕候、弥御勇健被成御座、目出  
度御儀奉存候、然者伊木左殿、御小仕置役被  
仰付候段、為御知被成下御紙上之趣承畏仕候、右御請答  
為可申上如斯御座候、恐惶謹言

二月六日

高尾助太

(池田)  
要人殿

猶以佐藤孫兵衛義、此節其御地へ罷越し居申候ニ付、

一名ニ而御請申上候、已上

【14】

去ル二日之貴書相達拝見仕候、然者去ル朔日御触之趣、  
池田要人殿へ申来候条、則御写壹通御差越被下、承畏仕  
候、右御請答為申上如斯御座候、恐惶謹言

二月六日

高尾助太

山脇兵作様

猶以佐藤孫兵衛義、此節其御地へ罷越居申候ニ付、一  
名ニ而御請申上候、已上

【15】

去ル二日之貴書相達致拝見候、然者  
御上伏見御止宿之節左之品々

御時計筈

同くさり

御袂時計

其外唐物類

右御品入

御覽候様被



仰付候間、鴻池江申談シ、品々取集同駅江持参可仕旨、

御紙面之趣致承知候、右御答為可得御意如斯御座候、恐

惶謹言

二月六日

高尾助太

岡本定七郎様

片山弥介様

江見清五郎様

大塚紋太夫様

芦田弥五兵衛様

高木順介様

【16】

去ル二日之貴札相達拝見仕候、然者薩州様御国許へ糟漬  
之海茸御進物ニ相成候付、老女奉文相添左之通、

一油紙包平桶壺ツ

一紙封状箱壺ツ

右之通船便御指登被成、早々相達し申様御同方様御屋敷  
申遣相達し可申旨、御紙表之趣承知仕、即達仕候、右貴

答申上度如此御座候、恐惶謹言

二月九日

伊東佐兵衛様

森 清助様

【17】

去五日之貴翰今八日相達拝見仕候、

上々様益御機嫌能被成御座、恐悦可申候、将又弥御健安

被成御勤役珍重御義可申候、然者此度紅鸚鵡一羽

(鳥津原興)

大隅守様へ被進候間、定夫源介御申付差越被成薩州御屋

敷へ遣候、鹿兒嶋江相廻候様可申通候旨、御紙上趣奉畏

候、則今日其御留守居田中善左衛門へ差遣し、源介附添

文ニ而飼方等之義委細敷合せ候所、御鳥慥ニ受取候、

早々御国元へ差遣候由申越候、右之段付答為可申上如此

御座候、恐惶謹言

二月八日

岩田七郎兵衛様

高尾助太

源介義十一日乗船申付

上嶋彦兵衛様

【18】

一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、

然者油方一件、一昨年御改革後大坂表へ某種御登相成候

(伊予松山藩主松平定通)

哉否之儀、松平隠岐守様御留守居合問合御座候ニ付、白

子屋与一郎手前承糺し候処、昨年式百石程相廻り候由申

出、其段不取敢及返答置申候、御同方様ニ而ハ御改革後

聊も御廻し無之処、当所問屋共ハ彼御国許油懸りへ登業

種之儀催促いたし候ニ付、御並様御振り合御聞繕之上、

御議定も有之乎之趣、御内実ハ、御登せ不被成方御勝手

宜キ由ニ御座候、御改革御触面ハ、是迄之通業種廻し高

減石無之様ニとの事ニ有之候得共、御取向方いか、有御

座候や、且御内実之所も委細被仰越被下度奉存候、右之

趣為可申上如此御座候、恐惶謹言

二月十三日

高尾助太

薄田長兵衛様

【19】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御儀奉存候、

(筑前秋月藩主黒田長韶)  
然者黒田甲斐守様当所御留守居中山平兵衛合、別紙之通

以廻札申来候ニ付、則写一通指上申候、此段御合置可被

成下候、右為可申上如斯御座候、恐惶謹言

二月十一日

高尾助太

(池田) 池田 要人様

(宮城) 宮城 舍人様

(伊木) 伊木 空 様

(中村) 中村 主馬様

(田中) 田中 内記様

【20】

貴答書相達拝見仕候、愈御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存

候、然者福岡屋長兵衛附添人之義御噂申上候処、御承知

被遣、則作之介と申者御差登させ被成致着坂候、仍之御

奉行所へ御届申候処、沖船頭新吉指揃不罷登而ハ対決不

被仰付との事ニ付、其旨長兵衛へ申移し候処、別紙之通

申出候間、(抹消)「承届ケ、松屋吉兵衛と申者新吉代人として

着坂之御届可仕奉存候、左様御承知置可被下候、右御再

答申上度、旁如此御座候、恐惶謹言」

然者御参府之節御会釈金別紙之通於伏見駄御渡し被下度

此段御噂申上候、宜様奉頼上候、右為可得貴意如此御座

候、恐惶謹言

二月廿日

高尾助太

佐谷嘉太夫様

【21】

去ル二日之貴書相達拝見仕候、愈御堅勝被成御勤役珍重

御儀奉存候、然者塩見町のし屋庄兵衛義、先達而御呼

登しニ付役人代として野田屋町福田屋熊次郎付添罷登り

居申候処、同人義近頃病身ニ御座候ニ付、此度代りとし

て塩見町松屋専介罷登り度旨申出候ニ付、御指登被成、

同人儀無滞着坂仕、御紙表之趣承知仕候、右貴答為可申

上如斯御座候、恐惶謹言

二月廿一日

高尾助太

舟戸彈之丞様

【22】

一筆致啓上候、愈御堅固被成御勤珍重奉存候、然者左之

通

備中窪屋郡馬喰市村

伊勢吉梓

銀次郎

右之者親子式人連ニ而去已十一月土佐国へ罷越順路中、

西野地村ニ而父伊勢吉病氣指発、当正月四日死去いたし、

相残ル銀次郎幼少ニ付順路難相成、依之右村ニ養育被申

付、別紙之通土佐守様御留守居尾崎伝藏ニ申来候間、則

(土佐高知藩主山内豊資)

来翰一通并往来手形写とも致進達候、御糺被成相違無之、

迎人罷越候ハ、一先登坂之上、御同方様御屋敷ニ而、

御国入手形請取罷越候様御計可被下候、右為可得御意如

斯御座候、恐惶謹言

二月廿一日

高尾助太

吉田勘左衛門様

去ル十四日之御札相達致拜見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sup>者</sup>去十日晩和氣郡伊里中村へ肥後国玉名郡中程村亡喜右衛門妻悴娘とも三人送来、村役人共及見候処、母娘共大病之様子ニ付、段々薬用介抱等念入致遣候得共、母娘共相果悴人相残り、尤母儀逆も難相陵候間、若相果候ハ、悴儀ハ本国へ村継送りニ致呉候様達て申置候由、則村役人共申出候付被成御噂、式人之者ハ仮葬御申付、悴儀未幼少之義、本国へ迎人罷越候様右御屋敷類役共へ相談し可申旨、此段御郡代も被仰聞候由、御紙面之趣致承知候、則及懸合候処、別紙之通梅原善之介の一応之返書指越し候間、猶追而委細申越し次第可得御意候、左様御承知置可申候、右御答旁如斯御座候、恐惶謹言

二月廿四日

高尾

大口助七郎様

猶以来翰一通進達いたし候、御披見後追而御返し可被下候

貴答書相達拜見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然<sup>者</sup>福岡屋長兵衛并付添役人代作之介着坂之御届仕候処、沖船頭新吉指揃不罷登而ハ対決不被仰付との事ニ付、其旨長兵衛へ申聞候処、幸ひ野田屋町松屋吉兵衛と申者登合居中間、新吉代人ニ相立申度由ニ而、長兵衛召連御屋敷へ罷出候ニ付、其訳書付させ、一応御尋申上候処、御承知被成下、町方へ御移させ被成候所、吉兵衛義ハ御国ニ相下、勿論何も急無之旨申出、則役人共書取一通被遣、如何之間違ニ有之候哉、長兵衛・作之介・手前屹と相糺可申旨御紙面之趣承知仕候、早速呼寄候所、作之介義ハ不快之由にて長兵衛罷出、先頃吉兵衛と申者、同人兄弟惣十郎と申者之由相断候、併作之介不罷出而ハ難相糺、病牀如何様ニ候や、是非共同道罷出候様申聞候所、作之介義□步行難仕由と申候、当時登合相下、のしや庄兵衛附添参候ニ付、惣十郎義彼吉兵衛兄弟にて、何所之者ニ候やと相尋候所、実ハ吉兵衛妻之兄弟にて、備中浅口郡赤崎村之者之由申候、甚以申口間違不届之段、



難承置候へ共、御呼上セ中之義セ有之候間、

公辺御裁許之上、猶又御通達可申上候、差向新吉義不罷登候而ハ

公辺御届難相成候間、同人急々罷登候様被仰付可被下候、尤訴状面ニハ東中嶋同所新吉と有之候へ共、兒嶋郡小串村之者之由相聞申候、左候ハ、同人并同村附添役人共相登候筈ニ御座候間、吉田勘左衛門へ御談合可被下候、私も其由勘左衛門へ申通候、右之段為可得貴意如此御座候、恐惶謹言

三月

高尾助太

舟戸彈之丞様

尚々、本文申上候長兵衛申口、書付させ差上申候、  
(ママ衍字)  
差上候上、御留置被成可被下候、以上

【25】

一筆致啓上候、然者去秋当所橘通八丁目嶋屋孫兵衛分御国東中嶋福岡屋長兵衛・同所沖船頭新吉相手取、預銀出入之義及出訴、則御呼出之上、訴状一通相渡候ニ付、例

之通町奉行へ及懸合候処、右長兵衛并附添役人代共着坂いたし候ニ付、

公辺御届仕候所、沖船頭新吉差揃ひ不罷登而ハ対決不被仰付との事ニ付、長兵衛呼寄申移候所、新吉義ハ兒嶋郡小串村之者之由申出候、尤訴状面ニ東中嶋同所新吉と御座候ニ付、是迄御懸合不申候得共、右之通小串村之者之よし相聞申候間、御糺被成、相違も無之候ハ、新吉并附添役人共急々罷登候様被仰付可被下候、則初度相渡り候訴状写し一通進達いたし候、委細町奉行へ及懸合置候間、同方も御承知被下、宜御計可被成候、右之趣為可得御意如此御座候、恐惶謹言

三月朔日

高尾助太

吉田勘左衛門様

【26】

去月十六日之御札相達致拝見候、春暖之節、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者此度御城代へ御進物千白魚八升、毎之通御指登し被成、則判形中添翰共致落手候、并京都

御進物之分、早々指登可申旨致承知、取計申候、右御答為可得御意如此御座候、恐惶謹言

三月二日

高尾助太

長谷井治作様

【27】

去月十七日之貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者<sup>(5)</sup>当月三日可被遊

御免駕旨被仰出候、就右、御用過書船別紙之通申出候ニ付、則彥通御指登し被成、毎之通宜取計可申旨御紙表之趣承知仕候、右貴答為可申上如斯御座候、恐惶謹言

三月二日

高尾助太

森川助左衛門様

【28】

御答書相達致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、

然者<sup>(6)</sup>留船方筆墨代之義、得御意候所、御承知被下、先般帳紙差登之節、御一所ニ御登し可被成筈ニ御座候所、御

下方之者失念いたし御延引相成候旨、御念書之趣致承知候、則此度銀拾匁御差越被成落手いたし、早速相渡し申候、右御再答為可得御意如此御座候、恐惶謹言

三月二日

高尾助太

松本惣八郎様

赤木孫右衛門様

【29】

貴答書相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者<sup>(7)</sup>先般登萊種子之義ニ付、御懸合申上候処、此度御細答被成下、御紙表之趣承知仕候、承合せ之上、追而可申上候、右再ひ御請為可申上如此御座候、恐惶謹言

三月四日

高尾助太

薄田長兵衛様

【30】

去ル十日之御状致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者<sup>(8)</sup>此度御道中御荷物御積廻し被成、毎之通伏見駅へ差

登可申候、仮御給取彦七郎才料御申付之由、御紙面之趣致承知候、則今十三日御荷物無滞着坂致候ニ付、如例取斗可申候、右御答為可得御意如此御座候、恐惶謹言

三月十三日

佐藤孫兵衛

長谷井治作様

高尾助太

尚々、

(前岡山藩主池田斉政の子斉輝の正室)

寛彰院様御国へ御越被成候ニ付、当表御止宿相成、就

右被仰合候義も御座候ニ付、於伏見御談も被成候間、致承知候、此方ニても右御相談申度義も申合有之候、以上

【31】

(抹消)

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、

然者左之通、

一文 一通

紙包 状箱壹ツ

右者 薩州様当所御屋敷へ到来仕候ニ付、指出申候間、

宜様奉頼上候、右得貴意度如此御座候、恐惶謹言

三月十八日

高尾助太

笹岡紋次郎 様

田坂六郎兵衛様

塙鉄五郎様

【32】

一筆啓上仕候、愈御勇健被成御座目出度御儀奉存候、

(伊予松山藩主松平定通)

然者 松平隠岐守様当所御留守居森左源太へ別紙之通申越

し候ニ付、則来翰指上申候、宜様御計可被成下候、右之趣為可申上如斯御座候、恐惶謹言

三月廿二日

高尾助太

(池田) 要人様

(伊木) 伊 李様

(中村) 中 主馬様

(田中) 田 内記様

【33】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御儀奉存候、

然者 去ル卯年此方様御家中荷物、防州大嶋郡安下庄幸吉

船ニ而江戸へ積下り之節、同庄孫右衛門・同郡八嶋村弥助兩人乗組申合、荷物箱明ケ衣類其外盜取候付、御召捕ニ相成、籠舎之上、孫右衛門ハ無間及死亡、弥介儀者（長門萩藩主毛利吉元）旧臘廿一日死罪ニ行レ候旨、別紙之通松平大膳大夫様当所御留守居申聞候付、此段入御聞申候、宜様御計可被下候、右為可申上、如此御座候、恐惶謹言

三月廿四日

高尾助太

池田 要人様

伊木 本様

中村 主馬様

【34】

貴書拝見仕り、弥御勇勝御勤役被成珍重御儀奉存候、然者鴻池善右衛門・近江屋久右衛門へ海老米烏賊一籠ツ、被遣候付、試ミ被遣相試候所、風味宜御座候間、則指遣し申候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

三月廿四日

佐藤孫兵衛

高尾助太

岩田七郎兵衛様

【35】

当廿二日之御状致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者御作廻方々例年之通、鴻池善右衛門・近江屋久右衛門江塩煎海老米烏賊一籠ツ、被遣、則青目籠入二并試之分小籠入一、何茂御封印御認、廿二日午中刻、二日切之飛脚を以御指立被成、今廿四日未ノ刻相達候付、風味相試候所、至極宜候間、則指遣し申候、右御答可得御意、如此御座候、恐惶謹言

三月廿四日

佐藤孫兵衛

高尾助太

遠藤五左衛門様

尚以、御作廻方々状箱二・封状一通致落手候、雨用意之品御返し申候

【36】

一筆啓上仕候、

〔池田齊典〕

殿様益御機嫌克御旅行被遊、恐悦奉存候、然者去ル廿日於伏見

御止宿、左之通

干鯛一箱

炭屋

安兵衛

扇子一箱

御扶持被下 御館入被

仰付候御礼

倉橋屋

干鯛一箱

勝兵衛

御扶持并御銀被下、大坂御屋敷御名代役被

仰付候御礼

右兩人共、先達而奉願上候通、御礼申上難有仕合奉存候由申出候、右為可申上如此御座候、恐惶謹言

三月廿五日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

〔37〕

一筆啓上仕候、

殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、然者此度

翻刻 天保五甲午年江戸御国状留

御参府ニ付、御国分御船ニ而御廻シニ相成候御用荷物

数々、今年も近例之通船宿へ木箱封ニ仕、船指出せ無滞

積登し相済申候、仍之先日伏見ニ而御渡被成請取罷帰候、

過書座役人江被下候御会釈金都合式而壹歩式朱指遣不申

候、右之金ヲ以、別紙松本榎之介書付之通取計せ、殘金

壹兩壹歩一朱返上仕候、御請取御近例之通宜御計せ可被

成候ハ、右為可得貴意如此御座候、恐惶謹言

四月三日

高尾助太

佐谷嘉太夫様

覚

一金式兩壹歩式朱

内

南鐐壹片

御荷物過書船積越候節、御船手之者罷出取

計仕候付、為御会釈被下

同式片

過書船宿之者兩人荷積致出情候ニ付、御心



付被下

金式步三朱

過書船問銀<sup>(7)</sup>并增加子賃<sup>(8)</sup>

残而

金壹両壹步壹朱

右之通、過書座へ被下御会釈金ヲ以取計仕、差引残

過金返上仕候、已上

午四月

松本槌之介

高尾助太様

恐惶謹言

四月十三日

佐藤孫兵衛

中山長左衛門様

高尾助太

梶田半兵衛様

猶以中野猪平太江之分、私共江之御状ニ七嶋包三箇と

被仰越候へ共、式箇相廻り申候、才右衛門之分共三

箇ニ相成候儀と相心得、其儘指登申候、此段為念得御

意置候、以上

【38】

先月廿六日・廿九日両度之御状相達致拝見候、暖和之

節御座候処、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者伏見

石津才右衛門江御用七嶋包細引栴式箇箱壹ツ御指越し

被成、相達可申旨致承知、則指登申候

一寛彰院様此度被成御廻京ニ付御入用之由、中野緒平太

へ御用七嶋包細引栴式箇并御幕申五拾六本御指越し被

成、是又早々指登申候、右御答旁得御意度如此御座候、

【39】

去ル九日之貴書相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重

御儀奉存候、然者左之通

一壹樽 御膳物

一壹棹 御長持

一式箱 蠟燭入

右石津才右衛門へ

一五樽 次味噌



一五樽 醬油

一六樽 大根漬

右中野猪平太へ

右者 寛彰院様御越之節、御入用之由、此度船便を以御指登し被成、着岸之上毎之通取計可申旨御紙表之趣承知仕候、則昨十四日夫々相達候ニ付、早々指登申候、右貴答申上度如此御座候、恐惶謹言

四月十五日

佐藤孫兵衛  
高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

【40】

御札相達致拜見候、薄暑之節、弥御堅固被成御勤珍重存候、然者此度 寛彰院様御帰ニ付、左之品々御廻し有之様、判形中へ相移候付、則御指登毎之通宜様取計可申旨致承知候

一壺ツ 御膳物

一壺棹 御長持

御膳物品々入

一式箱 蠟燭入筵包

右三口於伏見駅長谷井治作殿へ指向可申旨

一五樽 味噌

一五樽 醬油

一六樽 大根漬

右三口於京都御入用之分、中野猪平太迄指遣し可申旨

右御紙面之趣致承知候、則昨十四日相達候付、夫々指登申候、右御答迄如斯御座候、恐惶謹言

四月十五日

佐藤孫兵衛  
高尾助太

大森善七郎様

猶以御端書之趣致承知候、以上

【41】

一筆致啓達候、然者去ル十四日別紙先触一通、同日四ツ

時三ツ石<sup>ハ</sup>梨ヶ原江相達、其人ヲ以、直ニ有年江差送り候処、鉄藏・清五郎罷通り候跡ニ相成り、依之同駅<sup>ハ</sup>亦梨ヶ原江差返し候ニ付、全三石駅ニ而滞候義ニ候得共、梨ヶ原良藏・直介と申者之由、早速出立御早道兩人江追付相渡し候積リニ而、今十六日日午前当所迄罷登候得共、難追付、当御屋敷江断申出候、本<sup>ハ</sup>御早道<sup>者</sup>有年駅より別段先触差出し罷越候由ニ付、別段断書為差出、良藏・直介兩人共当所<sup>ハ</sup>罷帰<sup>リ</sup>候様申付候、依之右先触・断書共江戸表へ可指遣存候得共、鉄藏・清五郎自然立帰<sup>リ</sup>被<sup>レ</sup>仰付候得<sup>者</sup>、却而行違相成候事故、其元江向致進達候間、猶御吟味宜御取計可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

四月十六日

高尾助太

松井紋次郎様

【42】

是ハ地向伏留ニ可留事也

御手紙致拝見候、薄暑之節御座候所、弥御堅固被成御勤

珍重奉存候、然<sup>者</sup>御国元玉名郡中程村亡喜右衛門忤午吉、備前和氣郡伊里中村ニおゐて養育申付置候旨、先達而及御懸合候趣、梅原善之助殿<sup>ハ</sup>被仰達置候所、右午吉、中程村之者ニ相違無之候ニ付、迎之者御指登し可被成候旨、此度御国許<sup>ハ</sup>被仰越候旨、委細御紙面之趣致承知候、右御答旁得御意度如斯御座候、已上

四月十六日

高尾助太

関 素兵衛様

福田次左衛門様

【43】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sup>者</sup>肥後国玉名郡中程村亡喜右衛門忤午吉義、和氣郡伊里中村ニ而養育御申付被成候旨、先達而御懸合之趣申遣置候処、此度別紙之通、当所御役人<sup>ハ</sup>申来候間、則尙通致進達候、宜様奉願候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

四月十六日

高尾助太

大口助七郎様

【44】

罷出候処、左之通

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座日出度御儀奉存候、

(大坂東町奉行戸塚忠栄)

然者今廿二日町御奉行戸塚備前守殿御役所江御呼出ニ付

罷出申候処、別紙之通盜賊方与力牧野樵次郎申渡し、平

兵衛義奇特之義ニ付、為御褒美鳥目式貫文備前守殿御

直ニ御渡被成、尤盜賊者追々御役所ニおゐて御吟味御座

候由、平兵衛義御領分之者故相達候との事ニ御座候、此

段為可申上如斯御座候、恐惶謹言

四月廿二日

高尾助太

(池田) 要人様

(伊木) 伊 主 様

(中村) 中 主馬様

猶以本文之趣、片上村平兵衛ハも御屋敷江申出候、已

上

【45】

一筆啓上仕候、愈御堅勝被成御勤役珍重御義奉存候、

然者今廿二日町御奉行戸塚備前守殿御役所へ御呼出ニ付

七郎右衛門町老丁目

錢屋七郎右衛門方旅宿

備前国片上村

五十九船頭

平兵衛

右平兵衛義、大川町浜先ニ繫置候所持之逗船江這入

候盜賊ヲ差押、宿主所之者申合召連訴出候段奇特之

義ニ付、為褒美鳥目式貫文指遣候

右之通、盜賊方与力牧野樵次郎申渡し、平兵衛義奇特之

義ニ付、御褒美鳥目、備前守殿御直ニ御渡被成候、尤盜

賊者追々於御役所御吟味有之由、平兵衛義御領分之者故

相達候との事ニ御座候、此段平兵衛ハも御屋敷江申出

候ニ付、則小仕置中江申達候間、入 御聞置申候、右為

可申上如斯御座候、恐惶謹言

四月廿二日

高尾助太

森川助左衛門様

【46】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御儀奉存候、  
 然者御館入与力安東三郎兵衛儀病氣罷在候処、去月七日  
 死去仕候間、御承知置可被成下候、此段乍延引御達為可  
 申上如斯御座候、恐惶謹言

五月廿七日

高尾助太

池田 要人様  
 伊木 伊木 様  
 舟羽 丹登 様  
 中村 主馬様

【47】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者当所  
 詰未進加子三介義宿元無、抛用向共有之、且無人之  
 由ニ而不罷帰而ハ難渋之趣、内実ハ下地三介病氣中、当  
 分代リニ罷登居申心得ニ御座候由、然ル処、下地三介先  
 達而致病死候由ニ付、旁以此度御指返し相成候様、松本  
 槌之介ヲ以、達て申出候間、御操合被成、右代リ人御差

登し被下度奉頼候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

五月廿八日

高尾助太

松本惣八郎様

赤木孫右衛門様

【48】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉存候、

然者彦山

寛彰院様江被進之御品之由、左之通

油紙包壺

一 洪紙包壺

右者、使僧明珠院此度京都へ罷越候由ニ而、御屋敷江立

寄、右之御品々早々差上申候様、且御返答有之候ハ、

当月下旬下向之筈ニ付、其節迄ニ当所へ御廻し置被成候

様有御座度申間候ニ付、則式品共船便差下し申候間、宜

様御取計可被下候、奉頼上候、右為可得貴意如斯御座候、

恐惶謹言

六月三日

高尾助太

伊東佐兵衛様

森 清助様

【49】

一筆致啓上候、然者左之通

兄嶋郡阿津村

明神丸直乗船頭

藤 吉

水主共五人乗

（肥前小城藩主鍋島直堯）

右之者、去巳年十一月鍋嶋紀伊守様大坂御廻米船雇入、  
当所船宿之者、借り下申候所、漸当四月下旬爰許着船い  
たし候由、然ル処、右届米之内、過分不足米有之候ニ付、

於彼御蔵屋敷御札相成候所、一言之申訳無之、蔵入半ハ  
の船頭藤吉行衛相知不申由、廻船宿木屋市郎右衛門の別  
紙之通以書付申出候ニ付、則写老通并不足米算用書写と  
も致進達候、何分対談中行衛相知レ不申段、甚以不得其  
意事共ニ御座候、村方御札被成様子御申越可被下候、右  
為可得御意如此御座候、恐惶謹言

六月五日

高尾助太

吉田勘左衛門様

【50】

一筆致啓上候、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然者御茶  
壺御用ニ付、御簇之者着坂、例之通過書船申付指登し申  
候間、着之上、宜御取計可被下候、奉頼候、委細ハ御簇  
泰吉の可申出候、尤御用相済罷下り候節、前広ニ被仰知  
可被下奉頼候、右為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

六月七日

高尾助太

石津才右衛門様

【51】

去ル廿八日之貴札、去ル六日相達拝見仕候、弥御堅勝被  
成御勤役珍重御儀奉存候、然者例年之通宇治へ御遣し被  
成候御茶壺、町船ニ而御指登し被成、当地の過書船可申  
付、御茶下り之節も毎之通取計可申旨、御紙表之趣承知  
仕候、則御茶詰上ヶ相済、今廿日罷下り候ニ付、御簇之  
者泰吉・星野宗以家来とも直ニ元船へ積込せ指下し申候、



委細之儀ハ才料より御承知可被下候、右貴答為可申上如斯御座候、恐惶謹言

六月廿日

佐藤孫兵衛

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

【52】

去ル二日之貴書奉拝見候、暑氣相催候所、弥御安泰被成御座目出度御義奉申候、然者此度身延久遠寺御国外六ヶ国勸化之義從 公儀御触ニ御座候由、然所御国巡行不致様此許ニて取計可被成や、左候ハ、取扱致間敷之義先例取調候て可申上旨、御紙上之趣奉畏候

文政九年

一白銀十二枚

南部

松権寺

備前、備中御領分勸化

天保二年

一同十枚

愛宕山

備前勸化

近例右之通御座候、身延山当所取次所雷音寺之勸化巡行役僧罷登候ハ、対談致度段申通置候間、対談仕候而追

而可申上候、右御請答為可申上如此御座候、恐惶謹言

六月十日

高尾助太

中(中村)主馬様

尚々御尋候差進之義故、先達而江戸へ被仰遣間、御国勸化巡行之義、引合ニて取計ノ例不有之由ニ付、右被仰遣候旨相答申候、以上

【53】

去ル二日之貴書、七日相達奉拝見候、然者土鉄炮桜井宇八郎養子乙之丞義、心家風不申、双方相対之上致離縁、是非小山八百二手前へ指戻候間、宇八郎義奉恐入、遠慮罷有申候、右類家は非芳賀鉄之丞、大坂而者安内為立、指控口上書指出候間、於当地鉄之丞ニ指控口上書可指出候、同人從弟之統ニて、三日差控セ、四日目朝指控御免被成候旨御伺置被仰候、右相心得取計、口上書指上可被申旨御紙上之趣奉畏候、去ル七日同人指控口上書指出ニ



付、今日早朝御免申移候所、難有奉申候由、為御報私御小屋へ罷出申候、右為可申上、如此御座候、恐惶謹言

六月十日

高尾助太

中村主馬様

【54】

一筆啓上仕候、暑氣相催候所、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉申候、然<sup>者</sup>士鉄砲桜井宇八郎養子致離縁奉恐入、

遠慮罷有申候間、是非芳賀鉄之丞義、於此許為立指控口

上書去ル七日指出申候、同人義従弟之続<sup>ニ</sup>而、三日指控

せ、四日目朝御免被成候旨御伺置被仰候由、中村主馬殿

へ申来候ニ付、右之通相取計、今日早朝指控御免申移

候所、難有仕合奉申候由、為御礼私御小屋江罷出申候、

(中村主馬)

同人口上書ハ其俣主馬殿へ指出申候、右之段為可申上如

此御座候、恐惶謹言

六月十日

高尾助太

梶川甚太夫様

【55】

一筆啓上仕候、暑氣相催候所、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉申候、然<sup>者</sup>当所御掃除小人上道郡藤原村広次義、

去ル戌年へ当地ニ相詰申候、此度老母為見舞御国へ立帰

罷越申度由松本榎之助へ口上書を以願出申候間、承知差

下し申候、此段御伺置被成申候、右之段為可申上如此御

座候、恐惶謹言

六月十日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

口上之覚

上道郡藤原村

大坂詰掃除御小人

広次

右之者、去ル戌年へ相詰居申候、此度爰許老母為見舞

御国へ立帰し罷下申度旨願出申候、此段宜御嚮被成下

候様申上度奉申候、以上

午六月

松本榎之助

高尾助太様

同日

一御小人奉行虫明権左衛門へも申通也

【56】

一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者讃州丸亀御藏屋敷御留守居児玉助右衛門より別紙之通申越候付、則来翰壺通指上申候間、御承知可被下候、尤御返書等被遣候ハ、早々御指登し被成候様申上度奉存候、右為可得貴意如此御座候、恐惶謹言

六月十六日

高尾助太

森川助左衛門様

【57】

(大坂城代・下総古河藩主土井利位)

然者当所御城代土井大炊頭殿未御在府被成御座候ニ付、暑中御見廻御使者於江戸表相済候旨御書方々申来候、依之先頃御登し被成候伊部焼物御不用ニ相成申候、先例之

通来年御進物御入用ニ留置可申哉ニ奉存候、此段御伺旁為可申上如此御座候、恐惶謹言

六月廿四日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

【58】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者当地詰未進加子三介義病身ニ付御奉公難相勤り、仍之別紙之通松本榎之介より願出申候間、則壺通致進達候、宜御取計可被下候、右為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

六月廿四日

高尾助太

松本惣八郎様

赤木孫右衛門様

【59】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者赤坂郡西窪田村岩右衛門儀、悴猪之吉・同芳八三人連ニ而四

国辺路為修行、阿州板野郡大坂村迄罷越候処、右岩右衛門并芳八病氣指發り色々養生等被申付候へ共、先月廿四日致病死候付葬方被申付、相残ル猪之吉幼年ニ付順路難相成、依之右村ニ被指置、別紙之通彼御蔵屋敷御留守居坪井平右衛門合申来候間、則来簡書通并往来手形写共致進達候間、御札之上相違無之候ハ、迎人罷越候様御取計可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

六月廿六日

高尾助太

福田甚左衛門様

【60】

一筆啓上仕候、上々様益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然者御国表御同役様方合油紙包御用状箱壹ツ、去ル廿七日出二日切態飛脚を以御指越し被成、昨廿九日相達し申候、尤当地合ハ七日限付合便指立候様被仰越候処、同日飛脚出休日ニ付、今朔日右日限付合便を以指立申候、御落手可被下候、右為可得貴意如此御座候、恐惶謹言

七月朔日

佐藤

高尾

片山十右衛門様

【61】

去ル廿七日之貴札相達拝見仕候、愈御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者江戸表御同役様方合油紙包御用状箱壹ツ、二日切態飛脚を以御指越し被成、昨廿九日相達申候、尤当地合ハ七日限付合便を以指立可申旨承知仕候、然ル処昨日者飛脚出休日ニ付、今朔日右日限付合便指立申候、左様御承知可被下候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

七月一日

佐藤

高尾

岩田七郎兵衛様

竹村半十郎様

上嶋彦兵衛様

【62】

貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御義奉存候、  
然者

英彦山江

寛彰院様へ被進之御品左之通

一油紙包大小式ツ

右之通今船便御指登被成、彦山使僧明珠院下向之節、同  
人江相渡可申旨承知仕候、尤明珠院先日京都へ罷下り御  
屋敷立寄、直ニ帰り候ニ付、御用達之者方へ尋遣し候処、  
一昨日乗船由ニ付、早々指下し候様、右御用達之方江懸  
合遣し申候、右貴答申上度如斯御座候、恐惶謹言

七月十四日

高尾助太

伊東佐兵衛様

森 清助様

田坂六兵衛様

【64】

弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者当春被仰越候和氣  
郡伊里中村へ、肥後国玉名郡中程村亡喜右衛門妻悴娘  
三人送來り、右之内母娘共致病死忝人相残り候ニ付、  
本在分親類迎ニ参り候様、則類役共へ申遣し、於御国  
元被相糺候処、相違無之、迎人可被指越候旨梅原善之  
介来翰致進達候ニ付、大切ニ致養育候様被仰付置、然  
ル処右迎人今以罷越し不申、村方へ申出候ニ付、今一  
応懸合可申、御郡代江も御噂被成候旨委細致承知候、  
梅原善之介儀、御国元へ罷下り居申、代勤之者江懸合  
可申候、其内迎人等罷越候ハ、早々為御知可被下候、  
右御答得御意度如此御座候、恐惶謹言

七月十八日

高尾助太

大口助七郎様

一筆致啓上候、弥御堅固御勤珍重存候、然者御申越之  
寛彰院様御入用御酒左之通

一白雪酒式挺

【63】

(抹消)

去ル十一日之御状相達致拝見候、残暑甚敷御座候得共、

右之通今日船便を以指下申候、廻着之上御請取可被成候、則別紙代銀付一通進達いたし候、毎之通御計可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

七月廿四日

佐藤孫兵衛

高尾助太

大森善七郎様

【65】

去ル十一日之御状相達致拝見候、残暑甚敷御座候得共、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sup>者</sup>当春被仰越候和氣郡伊里中村江肥後国玉名郡中程村亡喜右衛門妻悴娘三人送來り、右之内娘母致病死、悴人相残り候ニ付、本在<sup>る</sup>親類廻ニ参り候様、則類役共へ申遣し、於御国元被相糺候処、相違無之、迎人可被指越旨梅原善之介来翰致進達候ニ付、大切ニ致養育候様被仰付置、然ル処右迎人今以罷越不申、村方<sup>より</sup>申出候ニ付、今一応懸合可申、御郡代江も御噂被成候旨委細致承知、梅原善之助義御国元へ罷下り居申、代勤之者へ懸合、善之介江進達いたし候様可

申遣奉存罷在候処、去ル十八日之御状相達し、午吉為迎組内林蔵と申者罷越無滯引渡相済候段、村役人共<sup>より</sup>差出候書類御差越被成委細被 仰下、夫々致承知候、事済候義乍略義以一紙御答為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

七月廿四日

高尾助太

大口助七郎様

猶以本文之一件、本在<sup>る</sup>為附記目錄、夫々致持参候由念入候儀致承知、猶序手之節挨拶宜申通候、已上

【66】

先月三日之御状、同十五日相達致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sup>者</sup>安治川上式丁目松野屋弥兵衛<sup>の</sup>兄島郡玉村良介へ相懸り御屋敷へ願出候一件、先達<sup>より</sup>願人<sup>より</sup>之濟口一札致進達候処、其段村方<sup>より</sup>も申出候ニ付、則書付御指越し被成致一覽候、右書付之表ニ而ハ煮売屋仕切ハ去年九月切世話人佐野や為之介・伊丹屋仁右衛門・亭屋与兵衛<sup>の</sup>渡相済候積ニ相考、尤請取書ハ取置不申、為之介義京都罷登居申相分り不申旨、仁右衛門・与兵衛



兩人今断申候由相見へ申候、右一件相済候義ニ候へ共、  
為心得被仰下候旨、御別紙御書添之旨致承知候、右村方  
申出之通ニ而ハ事相済候義ながら、此方承込齟齬致候付、  
猶又願人并大和屋久七・伊丹屋仁右衛門・苧屋与兵衛呼  
寄承礼候処、有体之趣別紙式通申出候ニ付、為念再応御  
通達申候、且又出訴之節九六錢を正銀ニ取捨候と之義、  
九六錢ニ而ハ願面不宜心得ニ而良介へ応対之上其儘正銀  
に捨願出候由、既濟口之節迎も内実ハ九六錢を以請取候  
得共、此方江ハ正銀積リニ而申出候通之義御座候、此段  
も御承知置可被下候、右為念御再答旁如此御座候、恐惶  
謹言

七月廿六日

高尾助太

吉田勘左衛門様

猶以村方申出之趣ニ而ハ良介代磯吉帰村之添状願人へ  
相渡候様相見へ候得共、其節磯吉義故障有之候由相断  
代人船頭指出し候ニ付、其者へ添翰相渡申候、此方ニ  
而願人へ添状可渡筋無之、是等之処も申出致相違候間、  
村方御札可被下候、以上

【67】

御答書致拜見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者赤  
坂郡西窪田村岩右衛門義、同猪之吉・同芳八三人連ニ而  
四国辺路致順行、阿州板野郡大坂村ニ而右岩右衛門・芳  
八致病死、相残ル猪之吉幼年ニ付右村ニ而被指置、彼御  
蔵屋敷御留守居坪并平右衛門今申来之趣御通達可申候ニ  
付、御札被成候処、岩右衛門義当五月神社仏閣為参詣罷  
出候由、此度迎人罷越し、猪之吉義連歸り候段村方申出  
之義ニ付、御指越し被成、御紙面之趣致承知候、則書類  
夫々致一覽、猶先方御留守居へ宜様通達可申候、右御再  
答為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

七月廿六日

高尾助太

福田甚左衛門様

猶以本文岩右衛門義素拔参之儀、往来手形共全贖もの  
ニ而、委細村方注進書之通ニ御座候旨御端書之趣致承  
知候、夫々留置申候、已上



【68】

一筆啓上仕候、弥御安康被成御勤役珍重御義奉存候、

然者 宗門御改書上、左之通

御門番人

一式通

御加子之者

御掃除之者

預り之者

一式通

私分

右之通、此度飛脚便を以指出申候、御落手被下、宜様奉頼候、右為可得貴意如此御座候、恐惶謹言

八月六日

高尾助太

小川亦六様

尚以随分念入候得共、自然書損等御座候ハ、代判光岡省吾被仰聞可被下候、奉頼候、以上

【69】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者 当表

天満御屋敷御門番勇治寺請証文迄通致進達候、御落手可

被下候、右得御意度如此御座候、恐惶謹言

八月六日

高尾助太

原田勝作様

【70】

一筆啓上仕候、然者 鴻池善右衛門義、近来病中引籠居申候処、当月二日発熱相勝不申、段々指重り養生不相叶、昨日死去仕候段申出候、右之趣為可申上如此御座候、恐惶謹言

八月八日

高尾助太

池田 要人様

伊木 空 様

丹羽 登 様

中村 主馬様

竹村半十郎様

片山十右衛門様

田中 内記様

宮城 舍人様

山脇 兵作様

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

但此分計御目付と両名

【71】

去ル七日之御状相達致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sup>者</sup>当地詰未進加子三介義病身ニ付、御暇願出候段、松本榎之介ノ申出候ニ付、其旨得御意申候処御承知被下、此度御代り三介被 仰付御登し被成、昨十五日無滞致着坂候、同人宗門手形杓枚御指越被成致落手候、彼是御役介奉存候、仍之下地三介義今十六日指下申候、右御答可得御意如此御座候、恐惶謹言

八月十六日

高尾助太

松本惣八郎様

赤木孫右衛門様

尚以下地三介分宗門手形杓枚致返却候、御落手可被下候、已上

【72】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉存候、然<sup>者</sup>江戸表宮城舎人殿ノ御用状封、去ル六日出七日切附合便、御指越し被成候処、道中指支候由ニ而、今十八

日相達申候、尤当所ノハ早々御達申候様申来候ニ付、二日切付合便を以指立申候、御落手可被下候、右為可得貴意如此如此御座候、恐惶謹言

八月十八日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

【73】

去ル十八日之貴札相達拝見仕候、然<sup>者</sup>先達而指出候宗門御改書上、兵作殿当ニ仕候処、今年江戸御詰ニ付、貴殿様当ニ而差出し申候埒ニ御座候間、早々相認替、九月三日附差出候ニ付、右御日限間ニ合候様差出し可申旨承知仕候、認替急便ヲ以差立申候間、御落手被下、猶宜様奉願候、甚不案内彼は御役介罷成、忝奉存候、右貴答旁申上度如斯御座候、恐惶謹言

八月廿三日

佐藤孫兵衛

高尾助太

小川亦六様

猶以被人御念候御端書之趣承知仕候、随分念入申候得共、自然書損等之儀御座候ハ、代判之者ニ被 仰付可被下候、已上

【74】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者兄嶋郡阿津村藤吉船、当四月鍋嶋紀伊守様大坂御廻米積請罷登候処、不足米有之、彼於御蔵屋鋪御札相成候節、申訳無之蔵入半々藤吉行衛相知レ不申、仍之廻船宿木屋市郎右衛門ハ御屋敷江願出候趣、得御意候処、御承知被下、村方江被仰付、御札させ被成候所、藤吉義宿許へ罷帰居申ニ付、早々登坂訳立候様、嚴敷被仰付、則本人藤吉ニ親類繁蔵附添御差登被成、先達而致着坂候、早速廻船宿木屋市郎右衛門へ及懸合候処、先般指登置候金子拾両、仲人手前遣込ニ相成候由ニ而市郎右衛門手前へハ相達不居申趣、段々応対いたし候へ共、訳付不申候由、銀高も拾貫目余之儀、一向対談難行届ニ付、附添繁蔵指下、銀子調達いたし来月廿日迄ニ登坂、猶又及対談度旨、別紙

之通願人并藤吉ハ申出候ニ付、承届差下申候、元来積受米不足之訳、藤吉壳取居申候由、甚以不埒之儀御座候、若又此上相對遅々致し候ハ、紀伊守様衆ハ正面相達候義も難計、甚致心配候、繁蔵指下候間、木屋市郎右衛門方対談之様子猶又御聞札被下、右日限無相違罷登、早々訳立候様被仰付可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

八月廿九日

高尾助太

吉田勘左衛門様

【75】

貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者近江屋久右衛門例年之通、焼鮎一籠被遣候ニ付、去ル廿九日出二日切態飛脚を以御指越し被成、昨朔日申上刻相達申候、外ニ為試小籠一、御指添被遣試候処、風味宜御座候ニ付、即日御添翰共為持遣申候、則返書指越候ニ付、指出申候間、御落手可被成下候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

九月二日

佐藤

岩田七郎兵衛様

高尾

【76】

御状相達致拝見候、秋冷之節弥御堅固被成御勤奉珍重候、然者御作廻方今例年之通、近江屋久右衛門江焼鮎一籠被遣候ニ付、則青目籠入忝ツ并私共試之分小籠入忝ツ、何れも御封印御認、去ル廿九日午中刻出、二日切態飛脚を以御指立被成、昨朔日申上刻相達申候、早速試候処、風味宜御座候ニ付、即日取計相済申候、右御答迄如此御座候、恐惶謹言

九月二日

佐藤

高尾

遠藤五左衛門様

猶以御作廻方今之状箱忝ツ・封状忝通致落手候、外ニ雨用意之品共御添被成候由致承知、此品ハ直ニ飛脚之者へ指返し申候、以上

【77】

去ル二日之貴答書相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御義奉存候、然者東中嶋町福岡屋長兵衛、先達而御呼登中連印之内、沖船頭新吉義不罷登候ニ付、代人トして野田屋町松屋吉兵衛と申者相立度申出候節、長兵衛申口度々間違、不届之儀故出入相済、六月十七日罷下り候ニ付、帰着之上御法式通り被 仰付候様申上候処、御糺被成厳敷御呵り追込被 仰付候旨被入御念、御紙表之趣委細承知仕候、右再ひ貴答為可申上候、如斯御座候、恐惶謹言

九月七日

高尾助太

舟戸彈之丞様

猶以願人今之済口一札指上候処、長兵衛今も申出候ニ付、願人一札御返却被下落手仕候、已上

【78】

一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御義奉存候、然者今廿七日左之通

鴻池善九郎

上嶋彦兵衛様

亡父善右衛門へ被下置候通、御米七百俵式百五拾人御扶持無相違被下、御藏元其外御用向只今迄之通被仰付候

【80】  
同文言

右之通被仰渡候間、此段御届為可申上如斯御座候、恐惶

謹言

十月八日  
小川亦六様  
高尾助太

九月廿七日

佐藤

高尾

上嶋彦兵衛様

猶以本文之趣御勘定所へ御届等宜様御移被成可被下候、以上

【81】

一筆致啓上候、然者土倉四郎兵衛殿家来瀧平之丞妻義、去ル五日致死去候段申越候、佐藤孫兵衛娘ニ而御座候ニ付、同人義来ル十四日迄忘中ニ居申候、此段小川亦六殿へ私今御届申達候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

【79】

十月八日

高尾助太

丸山鹿太様

一筆啓上仕候、然者土倉四郎兵衛殿家来瀧平之丞妻義、去ル五日死去仕候段申越候、佐藤孫兵衛娘ニ而御座候ニ付、同人義来ル十四日迄忘中ニ居申候、此段御届申上度如此御座候、恐惶謹言

十月八日

高尾助太

【82】  
一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者播州赤穂郡砂子村藤左衛門今和氣郡日生浦定八外五人相手取



公訴一件、当七月廿一日対決之上、六十日切済方被仰付、致帰村候処、最早御切日ニ相成、願人罷登リ候へ共、相手方之者罷登リ不申、仍之宿主御呼出ニ相成、急々罷登リ下済致候様被仰渡候旨、右宿主播磨屋卯右衛門ハ別紙之通申出候間、付添人共早々罷登候様敷被仰付可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十月九日

高尾助太

大口助七郎様

【83】

一筆致啓上候、冷氣之節御座候処、弥御堅勝被成御勤珍重奉存候、然者去ル二日便被仰越候御酒左之通

一式挺  
三挺之内  
一忝挺

白雪酒  
白鶴酒

右之通今日船便指下し申候、着岸之上御請取可被成候、則代銀書付二通致進達候、残白鶴酒忝挺、後船ニ指下し可申候間、左様御承知置可被下候、右為可得御意如此御

座候、恐惶謹言

十月十二日

高尾

河村寛左衛門様

守屋清左衛門様

猶以佐藤孫兵衛義、忌中ニ居申候ニ付、私一名ニ而得御意候

一御用酒外箱数少ニ而每も指支申候、白鶴之分ハ御次酒と奉存候間、此後箱ニ不入指下し不苦哉、御相談申度候、以上

【84】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤奉珍重候、然者先日御申越之御入用増之分白雪酒忝挺、今日船便差下し申候、着岸之上御受取可被成候、則代銀書付忝通致進達候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十月十三日

高尾助太

安井七兵衛様



猶以佐藤孫兵衛忌中居申候ニ付、私一名ニ而得御意候、已上

一外箱明き之分、早便船御返し可申候、已上

【85】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者白鶴酒三挺之内壹挺、今日船便指下し申候、着岸之上御請取可被成候、右為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

十月十三日

高尾助太

河村覺左衛門様

守屋清左衛門様

猶以本文三挺之内残壹挺、尚又後船ニ差下し可申候、已上

【86】

去ル五日之貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者松本左右衛門義、御加子引廻并御船作

事奉行兼帶被仰付候、右為御知被成下承知仕候、右貴答為可申上如期御座候、恐惶謹言

十月十五日

佐藤孫兵衛

森川助左衛門様

高尾助太

【87】

去ル九日之御状相達致拝見候、冷氣之節愈御堅固被成御勤珍重奉存候、然者当地在勤之者共義宜相勤候段、得御意候所被仰達、右同日、左之通森川助左衛門殿被仰渡候

大坂詰舵取並

松本槌之助

一米壹俵  
右之者定役無懈怠出情相勤候条、仍之為加増差遣候

同所御加子

三次郎

一同壹俵充

同

繁次郎

右之者共定役出情相勤候条、依之為加増差遣候

一銀三匁充

同 同 吉介  
繁藏

右之者共定役出情相勤候条、依之為褒美差遣候上、右之  
通今十五日申渡候処、何れも難有仕合奉存候、猶御請御  
札として罷出申候、右得御意御報旁如斯御座候、恐惶謹  
言

十月十五日

高尾助太

松本惣八郎様

松本左右衛門様

猶以御追啓之趣致承知、則御指紙致返却候、已上

【88】

大坂詰掃除御小人

御野郡北方村

猪八郎

右之者去ル辰年々相詰居申候、実貞相勤申候、此度大風  
ニ而在所居宅及大破、家内足弱計ニ而取繕も難致候付、  
御国へ罷帰度旨松本榎之介々別紙口上書差出申候、御聞

届申度代り人罷登候様被 仰移可申候、代り人着坂之上  
差下候様仕度奉申候、同人義実貞相勤候間罷帰候上、御  
小人相勤候様御噂も御噂申上度奉申候、以上

十月

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

〔松本〕  
榎之介口上書書取相添、十月廿五日七郎兵衛殿

へ差出也

【89】

去ル七日之貴書相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重  
御儀奉存候、然者石田鶴右衛門様御儀、去ル五日御判形  
役被 仰付、御弓鉄炮拾挺ツ、御預被成、御本段御用并  
御作廻方屋鋪方共被仰付候旨、御紙表之趣承知仕候、右  
貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

十一月十三日

佐藤孫兵衛

高尾助太

上嶋彦兵衛様

【90】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御義奉存候、  
然者鴻池善九郎義、去月十五日善右衛門と改名仕候、此  
段為可申上如此御座候、恐惶謹言

十一月十四日

高尾助太

(宮城)

宮 舍人様

(山脇)

山 兵作様

猶以改名仕候節、御国表へ申達置候、其御地へ御国へ  
別段ニ御通達無御座候哉、此節心付申候ニ付、乍延引  
申上候、以上

【91】

一筆致啓上候、弥御堅剛被成御勤珍重奉存候、然者左之  
通

一銀壹貫三百目

京都盛岳院へ御預銀貳拾貫目利分

右之通御国へ相廻り申候ニ付、炭屋安兵衛為替手形壹枚  
指出候間、御落手之上御渡し被下、如例同院請取手形御

指越し可被下候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十一月十六日

高尾助太

中野猪平太様

【92】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者例年  
之通留船方帳紙并筆墨料共御廻可被下候、右為可得御意  
如此御座候、恐惶謹言

十一月十九日

高尾助太

松本惣八郎様

松本全右衛門様

【93】

去ル十一日之貴書相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍  
重御儀奉存候、然者当御屋敷詰掃除御小人御野郡北方村  
猪八郎義、去ル辰年へ相詰居申、実貞相勤申候、此度大  
風にて在所居宅及大破、家内足弱計ニ而取繕も難致に付、  
御国江罷帰度旨申出候ニ付、代り人之儀共御噂申上候処、

御承知被成下、右為代り備中柿木村孫之丞と申者御指登

被成、着之上宜取計可申旨、御紙表之趣承知仕候、則昨

十九日無滞着坂仕候、仍之猪八郎義今廿日指下申候、右

同人義実貞相勤申候間、罷帰候上、御小人相勤候様申上

候処、御談し可被成下旨被仰下承知仕候、右貴答申上度

旁如此御座候、恐惶謹言

十一月廿日

高尾助太

上嶋彦兵衛様

石田鶴右衛門様

【94】

御状相達致拝見候、寒冷之節愈御堅固被成御勤奉珍重候、

然者当所詰掃除御小人之内北方村猪八郎義、宿元無扨

義ニ付御差下し相成候ニ付、右代り人御指登相成候様御

移り御座候由、則備中柿木村孫之丞と申者御指立被成、

宜取計可申旨、御紙面之趣致承知候、昨十九日無滞着坂

致し申候、依之猪八郎義今廿日指下し申候、右御報旁為

可得御意如此御座候、恐惶謹言

十一月廿日

高尾助太

虫明権左衛門様

猶以御指替御小人御扶持方之義、中手合ニ御取計被成

候付、当月十四日迄孫之丞へ御渡置被成候由指下し申

候、御小人へ其御地ニ而十五日迄御渡被成候旨致承知

候、爰元御扶持方猪八郎江ハ十四日切ニメ十五日迄孫

之丞受取候様申付候、右孫之丞宗旨真言宗旦那寺備中

古地村法林寺之由被仰越、是又承知いたし申候、且判

形中々之御添簡壺通御越被成落手いたし申候、以上

【95】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御義奉申候、

然者去ル十六日矢部駿河守殿御役所へ諸家蔵元町人御呼

出別紙之通被仰渡候、宝曆之例も有之義留類相調候上申

候処、其節御届書等之義難相分、諸家御様子承合候所、

何方も同様にて、未決着不仕候、尚追々治定可申上候得

共、先一応御注進奉申候、恐惶謹言

十一月廿三日

高尾助太

池田 要人様

丹羽 登様

中村 主馬様

別紙書付指下置也

(別紙)

「先年御用臨時上納金之内、此度銀六百貫目長崎表江

差下し候ニ付、為付添長崎役人森長之丞明後三日当

表出立御領分致通行候間、御取締宜様御心添御座候

様存候、以上

午十二月

【96】

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御座目出度御儀奉存候、

然者今朔日銅座俵物方御役所へ御呼出しニ付罷出申候処、

支配御勘定正木作十郎殿・御普請役深沢常五郎殿へ左之

通御達御座候

先年御用臨時上納金之内、此度銀六百貫目長崎表へ差

下し候ニ付、為付添長崎役人森長之丞明後三日当表出

立、御領分致通行候間、御取締宜様御心添御座候様との御事

右之通別紙書付ヲ以被仰渡候ニ付、則一通指上申候、尤

陸路下向之由ニ御座候、宜様御取計らせ可被為下候、右

御注進為可申上、二日限ヲ以如斯御座候、恐惶謹言

十二月朔日

池田 要人様

丹羽 登様

中村 主馬様

【97】

一筆致啓上候、弥御堅固被成御勘珍重奉存候、然者今朔

日銅座俵物方御役所へ御呼出しニ付罷出申候処、支配御

勘定正木作四郎殿・御普請役深沢常五郎殿へ左之通御達

御座候

先年御用臨時上納金之内、此度銀六百貫目長崎表へ差

下し候ニ付、為付添役人森長之丞明後三日当表出立、

御領分致通行候間、御取締宜様御心添御座候様との御



事

右之通書付を以被仰渡候、尤陸路下向之由ニ御座候、此段御用手へ申達候得共、為念為御知申候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十二月朔日

高尾助太

鈴木才兵衛様

【98】

去月廿一日之貴札相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然<sup>者</sup>例年之通漬<sup>(14)</sup>餅一桶、鴻池善右衛門へ被遣候分、此度便船御指登し被成、宜取計可申旨承知仕候、則今朔日相達候ニ付指遣し申候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

十二月朔日

佐藤

高尾

岩田七郎兵衛様

【99】

去月十八日之貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然<sup>者</sup>当地御進物、左之通

一水母<sup>(15)</sup> 一水母 壺桶

御城代へ

一漬餅 壺石壺斗

私共江

右<sup>者</sup>例年之通、船便を以御指登し被成、昨三日相達落手仕候、尤委細之義ハ御書方へ 御下知可有御座旨、御紙表之趣承知仕候

一京都・伏見御進物都合五箇、是又今便御一所ニ御指登し被成、毎之通夫々相達可申旨承知仕、則取計申候、右貴答為可申上如此御座候、恐惶謹言

十二月四日

佐藤孫兵衛

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

石田鶴右衛門様

【100】

去月廿二日之御状相達致拝見候、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者例年之通当地御進物并私共〆配り之分、左之通

一水母 壺桶

御城代へ

一漬餅 三樽

私共〆配り之分

右之通此度御指登し被成、則判形中〆之添翰共夫々致落手候、外ニ京都中野猪平太へ四箇、伏見石津才右衛門江壺箇、一所ニ御指登し被成、毎之通取計可申旨承知いたし、則相達申候、右御答為可得御意如斯御座候、恐惶謹言

十二月四日

佐藤孫兵衛

高尾助太

安井七兵衛様

【101】

去月廿七日之貴札相達拝見仕候、弥御堅勝被成御勤役珍重御儀奉存候、然者此度京都江御鳥被進候ニ付、油紙箱壺ツ・洪紙包一ツ中野猪平太当ニ御指登し被成候間、着船之上、早々同人江相達し可申旨承知仕候、則今七日着船ニ付、即日指登し申候、右貴答申上度如此御座候、恐惶謹言

十二月七日

高尾助太

伊東佐兵衛様

森 清助様

田坂六兵衛様

【102】

去ル九日之貴札昨十一日相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉存候、然者鴻池善右衛門へ例年之通当暮左之通被下候旨、御用老被仰渡候

一御小袖 一

一御羽織 一

一鶴 一隻

一手代共江被下候御目録金子員数例年之通取計可申旨、

右二日限態飛脚ヲ以御指越し被成、則相達申候、尤右

箱ニ御認越被成候間、於当所宜取計可申旨、御紙表之

趣承知仕候、箱等用意仕、則申渡候処、重畳難有仕合

奉存候、猶為御礼罷出申候

右之趣申上度、貴答旁如此御座候、恐惶謹言

十二月十二日

佐藤

高尾

岩田七郎兵衛様

猶以御認具・洪紙・細引等、追而御勘定所へ御返し可

申旨承知仕候、以上

【103】

一筆啓上仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御儀奉存候、

(播磨林田藩主建部政醇)

然者当表御在番建部内匠頭様衆山脇兵作殿・森川助左

衛門殿当之紙包沓ツ、白木状箱沓ツ到来仕候、重サ高之

品御座候故、状箱共各様江向ケ差出し申候間、宜様御取

計可被成下奉願上候、右為得貴意如斯御座候、恐惶謹言

十二月十六日

高尾助太

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

石田鶴右衛門様

【104】

一筆啓上仕候、然者丹木次郎左衛門妻義、去ル十三日死

去仕候段申越候、高尾助太妹ニ而御座候ニ付、同人義正

月二日迄忌中ニ居申候、此段御届申上度如斯御座候、恐

惶謹言

十二月廿一日

佐藤孫兵衛

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

石田鶴右衛門様

【105】

右同文言

十二月廿一日

佐藤孫兵衛

高尾助太

小川亦六様

岩田七郎兵衛様

上嶋彦兵衛様

石田鶴右衛門様

【106】

然者丹木次郎左衛門妻義、去ル十三日致死去候段申越候、高尾助太妹<sup>三</sup>而御座候<sup>二</sup>付、同人義正月二日迄忌中<sup>二</sup>居申候、此段小川亦六殿へ私<sup>六</sup>御届申達候、右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

十二月廿一日

佐藤孫兵衛

光岡省吾様

雁 四拾四羽

真鴨 六羽

【107】

去ル十日之貴札相達拝見仕候、弥御勇勝被成御勤役珍重御義奉存候、然者京都御進物菰包四斗樽<sup>六</sup>、船便御差登被成、着之上毎之通中野猪平太江相達可申旨、御紙表之趣承知仕、則御添翰共早々差登し申候、右貴答為可申上如斯御座候、恐惶謹言

十二月廿日

佐藤孫兵衛

雁 三拾三羽

内

真鴨 六羽

雁 四拾四羽

右之通御差登被成、内御札付御座候分一羽私頂戴被仰付難有仕合奉存候、夫々取計相濟、御余計之分八毎之通相弘、鉛調<sup>江</sup>差下し可申旨、御紙表之趣承知仕候

鴨 六羽

鴻池善右衛門惣銀主共へ被下候

雁 壹羽

私江頂戴被 仰付候

残雁拾羽弘

代銀貳拾五匁

右代銀ヲ以、鉛相調船便差下し申候、御落手可被成下候、  
右為可申上、貴答旁如斯御座候、恐惶謹言

十二月廿日

高尾助太

津田十郎右衛門様

【109】

去ル九日之御状相達致拝見候、甚寒之節弥御堅固被成御  
勤珍重奉存候、然者例年之通当地銀主共へ被下候雁四拾  
四羽・真鴨六羽、毎之通御長持式棹ニ御入組御差登し被  
成御鷹方添翰共致落手候、将亦

一條様江御進物御鳥四斗樽江御入組、今便一所ニ御差登  
被成、中野猪平太江相達可申旨致承知、則判形中分之添

翰共早々差登申候、右御答可得御意如斯御座候、恐惶謹  
言

十二月廿日

佐藤孫兵衛

高尾助太

安井七兵衛様

猶以、明御長持船便ヲ以差下し申候、御受取可被下候、  
已上

【110】

去ル十八日之御状相達致拝見候、甚寒之節弥御堅固御勤  
奉珍重候、然者当御屋敷御門番人代り合ニ付、御郡方支  
配刀刺式人御指登し被成、今廿二日無滞致着坂候、尤旦  
那寺左之通

御野郡東河原村

近藤忠左衛門

一 宗旨日蓮宗竹田村妙新寺旦那

同郡青江村

渡辺儀右衛門

一 宗旨同宗二日市町妙勝寺旦那



右寺請手形其御地御用所へ御取置被成候由、御紙面之趣致承知候、右御答如此御座候、恐惶謹言

十二月廿二日

高尾助太

大森伝右衛門様

相渡し可申旨、御紙面之趣致承知、則相渡し請取手形致進達候、右御答為可得御意如此御座候、以上

十二月廿九日

高尾

虫明権左衛門様

猶以中野猪平太江之御別封、早々相達し申候、以上

【111】

去ル十七日之御札相達致拝見候、甚寒之節愈御堅勝被成御勤珍重奉存候、然<sub>者</sub>下津井四ヶ浦之者致獵業候ニ付、例年之通与力へ為御会积、金子貴様<sub>々</sub>金子御遣しニ付、則四箱御指越し被成、致落手、早々取計申候、右御答可得御意如此御座候、恐惶謹言

十二月廿二日

高尾助太

原田勝作様

【112】

御札相達致拝見候、寒氣之節愈御堅固被成御勤奉珍重候、然<sub>者</sub>当御屋敷御掃除定夫之内、釘持忝人増給米忝代式斗五升有之候ニ付、右扨代銀入忝包書付御添御指越し被成

松本惣八郎様

松本空右衛門様

猶以別紙御指紙并御覚書共致返却候間、御落手可被下候、以上

【113】

去ル廿五日之御状相達致拝見候、甚寒之節弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然<sub>者</sub>当地在勤之者共、勤向之儀御申達置被成候処、別紙之通、森川助左衛門殿<sub>々</sub>被仰渡候間、夫々可申渡旨、御紙面之趣致承知候、則今晦日申渡候処、何れも難有仕合奉存候、猶御請御礼として罷出申候、右為可得御意御報旁如斯御座候、恐惶謹言

十二月晦日

高尾助太

覺

大坂詰杞取並

一 壹朱金三片

松本槌之介

右之者定役出精殊ニ家内向和順之様子ニ相聞候条、

依之為褒美指遣候

同所詰御加子

一 銀 貳両

三次郎

右之者定役出精相勤并部屋内メリ向等宜候条、依之

為褒美差遣候

同所詰御加子

一 銀六匁充

吉介

同

繁藏

同

繁次郎

右之者定役出精相勤候条、依之為褒美指遣候

右之通申附候間、夫々可被申渡候、以上

森川助左衛門

十二月廿四日

判

松本惣八郎殿

松本李右衛門殿

- (1) 代 代Ⅱ俵。
- (2) 白魚 シラウオ科の魚、体長一〇センチメートル。肉は淡白で吸い物、すし種、酢の物になる。
- (3) 青目籠 青竹で編んだ籠、青い編み目のある籠。
- (4) 二日切態飛脚 二日の期間にて届ける特別仕立ての飛脚。
- (5) 過書船 中世では海関、河関通行の免許を持つ船、近世では特に淀川水系で貨客の輸送に従事した過書座支配下の特定の用船を言う。
- (6) 南鐐一片 南鐐二朱銀のこと、八枚を以て一両とした計数貨幣。
- (7) 間銀 合銀とも言う。手数料、口銭。
- (8) 加子 船を操る人。舵取り、船乗り。
- (9) 幕串 幕を立てるために立てる細い柱。
- (10) 伊部焼 備前焼。現在の岡山県備前市一帯で焼造される焼物。
- (11) 九六銭 江戸時代において銭九六文を以て一〇〇文として通用させていた慣習のこと。
- (12) 銅座 諸国鉱山から銅鉱石を集荷、精錬して輸出向けの棹銅や国内向けの地壳銅の鑄造、販売、輸送等の支配を行った機関。元文三年(一七三八)設置、のち廃され長崎銅会所となったが、明和三年(一七六六)復活した。勘定奉行・大坂町奉行の支配に属し、大坂商人により組織された。
- (13) 俵物 長崎貿易において中国向け輸出品となった水産加工品。煎海鼠、乾鮑、鱧鰯の三種。俵装されたので俵物と呼ばれた。
- (14) 鯡(へい) 魚の名。微細な小魚で「あみ」とも言う。蝦の一種。
- (15) 水母(くらげ) ここでは食用にする「ビゼンクラゲ」のこと。塩漬けにして桶に入れておく。

《地名》

【あ】

青江村 現岡山市。備前国御野郡のうち、村高一〇四二石余。  
赤崎村 現倉敷市。備前国児島郡のうち、村高七〇四石余。  
安治川上 安治川上通。現大阪市福島区。大坂三郷天満組のうち、一・二丁目がある。  
阿津村 現岡山市。備前国児島郡のうち、村高四四二石余。  
網浜 現岡山市。備前国上道郡のうち、村高八九二石余。吉井川と旭川を結ぶ倉安川の川尻水門があり、水門番所も置かれていた。

伊里中村 現備前市。備前国和気郡のうち、村高三二九石余。伊理中村とも記される。

有年（うね） 現兵庫県赤穂市。播磨国赤穂郡のうち、栗栖村の一部が町場化した地。家数一〇〇以上で宿駅であった。

大川町 現大阪市東区。大坂三郷北組のうち。

大坂村 現徳島県板野町。阿波国板野郡のうち、村高一五二石余。

小串村 現岡山市。備前国児島郡のうち、村高七二一石余。児島半島の北東端に位置し、東は児島湾に面する。

【か】

柿ノ木村 現岡山県清音村。備中国窪屋郡輕部村のうちに見える枝村。「旧高田領取調帳」によれば七二六石余。

片上村 現備前市。備前国和気郡のうち。行政村としては東片上村・西片上村と見える。東片上村、高九一五石余、西片上

村、高五九一石余。西片上村は片上湾の北奥に位置し、岡山藩から水主浦の一つに指定されていた。同村には藩の米蔵が置かれ、大坂蔵屋敷への蔵米輸送が課せられていた。

北方村 現岡山市。備前国御野郡のうち、村高九二六石余。

古地（こち）村 現岡山県清音村。備中国窪屋郡のうち、村高一七八石余。

【さ】

塩見町 現岡山市。岡山城下の一町、町人地、高六石余。

七郎右衛門町 現大阪市東区。大坂三郷北組のうち、一・二丁目があり、西横堀に沿う町。

下津井四ツ浦 現倉敷市下津井、児島半島南端にある港町。下津井村は備前国児島郡のうち、村高二五〇石余。

宿村 現岡山市。備前国御野郡のうち、村高五九六石余。

【た】

竹田村 現岡山市。備前国御野郡のうち、村高二五三石余。

橘通 現大阪市西区。大坂三郷、天満、北、南組のうち、一〜八丁目がある。一丁目は天満組、二〜七丁目は北組、八丁

目は南組。

玉村 現玉野市。備前国児島郡のうち、村高五一三石余。

天満 現大阪市北区。大坂三郷天満組のうち、一〜一丁目がある。

【な】

中程村 現熊本県岱明町。肥後国玉名郡のうち、熊本藩領、村高三七八石余。

梨ヶ原 現兵庫県上郡町。播磨国赤穂郡のうち、村高三二石余。

西窪田村 現岡山県赤坂町。備前国赤坂郡のうち、村高三八四石余。

西野地村 現高知県南国市。土佐国長岡郡のうち、土佐藩領、村高四九一七石余。

野田屋町 現岡山市。岡山城下の一町、町人地、高一六石余。

【は】

馬喰市町 白楽市村のこと。現倉敷市。備中国窪屋郡のうち、村高八五九石余。

東河原村 現岡山市。備前国御野郡のうち、村高五九四石余。

東中嶋町 現岡山市。岡山城下の一町、町人地、高一八石余。

日生(ひなせ)浦 現岡山県日生町。備前国和気郡のうち、高一五八石余。『備前記』によれば人数九三二、海船四〇、水主浦の一

つ。  
藤原村 現岡山市。備前国上道郡のうち、村高五八一石余。



二日市町 現岡山市。岡山城下の一町。もとは二日市村の一部。二日市村の市場を中心にして町場化が進み村分と分けて町方支配となり、二日市町と称した。

【ま】

砂子(まなご)村 現赤穂市。播磨国赤穂郡のうち、村高四〇七石余。

三ツ石 現備前市。備前国和気郡のうち、村高七八〇石余。

【や】

八嶋村 現山口県上関町。周防国大島郡のうち、村高一六二石余。

安下庄 現山口県橘町。周防国大島郡のうち、村高三一八七石余。

《人名》 本文史料部分に記された岡山藩士について、五十音順に、判明する範囲で①役職②禄高③家格について、注記したものである。

【あ】

赤木孫右衛門 ①船作事奉行 ②五五俵四人扶持 ③中小姓格。

芦田弥五兵衛 ①小納戸、大小姓組支配 ②一三〇石 ③平士。

伊木 奎 ①小仕置 ②一〇〇〇石 ③番頭。

池田 要人 ①小仕置 ②三〇〇〇石 ③番頭。

池田主税 ①仕置 ②三〇〇〇石 ③家老。

石田鶴右衛門 ①判形 ②三〇〇石 ③近習物頭。

石津才右衛門 ①伏見在番 ②一五〇石 ③平士。

伊東佐兵衛 ①本段留守居 ②二五〇石 ③近習物頭。

犬塚紋太夫 ①小納戸、大小姓組支配 ②一三〇石 ③平士。

岩田七郎兵衛 ①作廻方、判形兼帯 ②三七〇石 ③近習物頭。

上嶋彦兵衛

①判形 ②三〇〇石 ③物頭。

江見清五郎

①小納戸、大小姓組支配 ②二三〇石 ③平士。

遠藤五左衛門

①会所賄方、郡方支配 ②一八俵三人扶持 ③徒。

大口助七郎

①郡奉行 ②一三〇石 ③平士。

大森栄次郎

①大坂定目付 ②一五俵二人扶持 ③徒。

大森伝右衛門

①大役奉行、郡方支配 ②一八俵三人扶持 ③徒。

岡本定七郎

①小納戸、大小姓組支配 ②一三〇石 ③平士。

小川亦六

①小姓組与頭 ②三五〇石 ③物頭。

【か】

梶川甚太夫

①大目付 ②三〇〇石 ③近習物頭。

梶田半兵衛

①大納戸 ②一七〇石 ③平士。

片山十右衛門

①在江戸判形添役 ②三〇〇石 ③近習物頭。

片山弥介

①小納戸、大小姓組支配 ②一二〇石 ③平士。

【さ】

桜井宇八郎

①先徒 ②四〇俵四人扶持 ③士鉄砲。

笹岡紋次郎

①在江戸内所附 ②三〇〇石 ③物頭。

佐藤孫兵衛

①大坂定目付 ②五五俵四人扶持 ③士鉄砲。

佐谷嘉兵衛

①側見小姓頭 ②四〇〇石 ③近習物頭。

鈴木才兵衛

①片上在番 ②四五俵四人扶持 ③平士。

薄田長兵衛

①郡代 ②四〇〇石 ③近習物頭。

【た】

高尾助太

①大坂留守居 ②一〇〇石 ③平士。

高木順介

①小納戸、大小姓組支配 ②六〇俵四人扶持 ③平士。

瀧 平之丞

①作廻方頭取 ②一五〇石 ③物頭。

竹村半十郎

①在江戸判形 ②三五〇石 ③近習物頭。

田坂六郎兵衛

①在江戸内所附 ②二二〇石 ③物頭。

田中内記

①小仕置 ②一〇〇〇石 ③番頭。

津田十郎右衛門

① ②三五〇石 ③番頭。

土倉四郎兵衛

①仕置 ②一〇〇〇〇石 ③家老。

【な】

中野猪平太

①京都留守居 ②一六〇石 ③平士。

中村主馬

①小仕置 ②一七〇〇石 ③番頭。

中山長左衛門

①大納戸 ②一〇〇石 ③平士。

丹羽 登

①小仕置 ②二〇〇〇石 ③番頭。

【は】

長谷井治作

①賄 ②四五俵四人扶持 ③士鉄砲。

塙 鉄五郎

①在江戸内所附格 ②一五〇石 ③物頭。

原田勝作

①船目付 ②五五俵四人扶持 ③平士。

福田甚左衛門

①郡奉行 ②一二〇石 ③平士。

舟戸弾之丞

①町奉行 ②四〇〇石 ③近習物頭。

【ま】

松本惣八郎

①船作事奉行 ②六六俵四人扶持 ③中小姓格。

松本左石衛門

①加子引廻船作事奉行 ②五〇俵四人扶持 ③平士。

丸山鹿太

①広敷奉行、銀札方見届兼帶 ②四五俵四人扶持 ③平士。

光岡省吾 ①町方寺社方目付 ②四五俵四人扶持 ③平士。  
宮城舎人 ①小仕置 ②二〇〇〇石 ③番頭。

虫明権左衛門 ①御小人奉行 ②二五俵三人扶持 ③士鉄砲。

森 清助 ①本段留守居 ②三〇〇石 ③近習物頭。

森川助左衛門 ①船奉行 ②六〇〇石 ③近習物頭。

【や】

安井七兵衛 ①留守賄 ②四〇俵四人扶持 ③士鉄砲。

山脇兵作 ①大小姓頭 ②四五〇石 ③近習物頭。

吉田勘左衛門 ①郡奉行 ②一六〇石 ③平士。

《役職名》

大坂定目付 一人。無足一五〇石。留守居に次ぎ、留守居不在時には代行。格式は平士。

大目付 四一六人。取高一五〇一〇〇〇石。役料九〇俵。格式は物頭。

御小人奉行 小人一小人仲間の略。小人を統括支配する役職。格式は士鉄砲。

御館入与力 大坂町奉行所の「町与力」であるが、大名蔵屋敷をも担当してこれに出入りし、干渉、取締方にあたっていた。

小仕置 三一六人。役料二〇〇俵、仕置を扶けて政務にあずかる。格式は番頭。番頭格で勤めた例もある。

作廻方 一一三人。取高二〇〇一〇〇〇石、役料一〇〇俵。格式は物頭。財政全般を司る。

士鉄砲 平士に次ぐ格にて、徒の上位に位置する。小仕置預、城代支配、作廻方支配、判形支配、留方支配等となる。

判形 二一五人。取高一八〇一〇〇〇石。役料一〇〇俵。裏判ともいう。出納全般を司る。格式は物頭。

用老 仕置のこと。格式は家老。七家三人。

《寺社》

彦山 ここでは英彦山神宮のこと。福岡県田川郡添田町に鎮座。

身延久遠寺

現山梨県南巨摩郡身延町にある。山号は身延山。日蓮宗総本山。

愛宕山

愛宕神社。京都市右京区嵯峨愛宕山上に鎮座。全国各地にある愛宕社の本社。

身延久遠寺の歴史は、日蓮上人が、寛文十三年（一七二〇）に、山梨県南巨摩郡身延町に、身延山に、久遠寺を建立したことに始まる。日蓮上人は、この寺を、身延山久遠寺と稱し、自ら、身延山久遠寺の住持となられた。この寺は、日蓮宗の総本山として、全国的に知られるようになった。この寺の歴史は、日蓮上人の生涯と密接な関係にある。日蓮上人は、この寺で、多くの弟子を育て、日蓮宗の発展に貢献された。この寺は、現在でも、日蓮宗の中心地として、多くの信者が参詣する。この寺の歴史は、日蓮上人の生涯と密接な関係にある。日蓮上人は、この寺で、多くの弟子を育て、日蓮宗の発展に貢献された。この寺は、現在でも、日蓮宗の中心地として、多くの信者が参詣する。



宗門手形	71	【鑑甲】
松権寺	52	【イ】
城代	26, 57, 99, 100	【イ】
定夫	17	【イ】
大坂御屋敷詰掃除定夫	112	【イ】
盛岳院	91	【イ】
船頭	45, 49, 66	【イ】
沖船頭	20, 24, 25, 77	【イ】
【た】		【イ】
俵物	96, 97	【イ】
銅座	96, 97	【イ】
土佐御屋敷	5	【イ】
【な】		【イ】
菜種	18, 29	【イ】
南鐐一片	37	【イ】
【は】		【イ】
間銀	37	【イ】
判形	10, 26, 40, 89, 100, 109	【イ】
飛脚	6, 8, 35, 60, 61, 68,	【イ】
	75, 76, 102	【イ】
普請役	96, 97	【イ】
船作事奉行	86	【イ】
法林寺	94	【イ】
【ま】		【イ】
目付	70	【イ】
門番	68, 69, 110	【イ】
網浜水門番	1	【イ】
【や】		【イ】
用老	1, 102	【イ】
与力	111	【イ】
盗賊方与力	44, 45	【イ】
御館入与力	46	【イ】
【ら】		【イ】
留守居	17, 18, 19, 22, 32, 33,	【イ】
	56, 59, 67	【イ】

【や】

安井七兵衛	84,100,109
矢部駿河守	11,95
大和屋久七	66
山脇兵作	5,6,12,14,70,73, 90,103
吉田勘左衛門	11,22,24,25,49,66, 74

【わ】

渡辺儀右衛門	110
--------	-----

《用語》

【あ】

愛宕山	52
伊部焼	57
会釈金	20,37
英彦山	62
彦山	48
大坂定目付	1
大目付	1
御小人	88,93,94

大坂詰御掃除小人・大坂御屋敷詰

掃除御小人 9,10,55,88,94

御小人奉行 55

御旗之者 50,51

【か】

廻船宿 49,74

加子 68,86,87,113

未進加子 47,58,71

増加子賃 37

柁取並 87,113

過書船 27,37,50,51

過書座 37

勘定所 78,102

給取 30

久遠寺 52

釘持 112

蔵屋敷 49,56,59,67

郡代 23,63,65

郡方支配刀刺 110

小仕置 1,13,45

【さ】

作廻方 1,8,35,76,89

土鉄砲 53,54

支配御勘定 96,97

宗門御改 68,73

- 白子屋与一郎 18  
 鈴木才兵衛 97  
 薄田長兵衛 18, 29  
 炭屋安兵衛 36, 91  
 関 素兵衛 42
- 【た】  
 高尾助太 105を除く全ての史料  
 高木順介 15  
 瀧 平之丞 79, 87  
 竹村半十郎 61, 70  
 田坂六郎兵衛 31, 62, 101  
 田中善左衛門 17  
 田中内記 19, 32, 70  
 津田十郎右衛門 108  
 土倉四郎兵衛 79, 81  
 坪井平右衛門 59, 67  
 土井大炊頭 54  
 戸塚備前守 44, 45
- 【な】  
 中野猪平太 38, 39, 40, 91, 100, 101, 107, 109, 112  
 中村主馬 19, 32, 33, 44, 46, 52, 53, 54, 70, 95, 96  
 中山長左衛門 38  
 中山平兵衛 19  
 鍋島紀伊守 49, 74  
 丹木次郎左衛門 104, 106  
 丹羽 登 46, 70, 95, 96  
 のし屋庄兵衛 21, 24
- 【は】  
 芳賀鉄之丞 53, 54  
 長谷井治作 26, 30, 40  
 塙 鉄五郎 31  
 原田勝作 69, 111  
 播磨屋卯右衛門 82  
 深沢常五郎 96, 97  
 福田次左衛門 42  
 福田甚左衛門 59, 67  
 福田屋熊次郎 21  
 福田屋長兵衛 3, 20, 24, 25, 77  
 舟戸弾之丞 3, 21, 24, 77  
 星野宗以 51
- 【ま】  
 牧野権次郎 44, 45  
 正木作十郎 96, 97  
 松平大隅守 17  
 松平隠岐守 18, 32  
 松平大膳大夫 33  
 松平土佐守 22  
 松野屋弥兵衛 66  
 松本惣八郎 28, 47, 58, 71, 87, 92, 113  
 松本槌之介 9, 10, 37, 47, 55, 58, 71, 87, 88, 113  
 松本左右衛門 86, 87, 92, 113  
 松屋専介 21  
 松屋吉兵衛 20, 24, 77  
 丸山鹿太 81  
 光岡省吾 68, 106  
 宮城舍人 6, 19, 70, 72, 90  
 明珠院 48, 62  
 虫明権左衛門 55, 94, 112  
 森 左源太 32  
 森 清助 4, 16, 48, 62, 101  
 森 長之丞 95, 96, 97  
 森川助左衛門 27, 45, 56, 86, 87, 103, 113  
 守屋清左衛門 83, 85

## 《人名》

### 【あ】

赤木孫右衛門 28,47,58,71  
 芦田弥五兵衛 15  
 安東三郎兵衛 46  
 伊木 奎 13,19,32,33,44,46,  
 70  
 池田 要人 13,14,19,32,33,44,  
 46,70,95,96  
 池田主税 1  
 石田鶴右衛門 89,93,99,103,104,  
 107  
 石津才右衛門 38,39,50,100  
 伊丹屋仁右衛門 66  
 一條 109  
 伊東佐兵衛 4,16,48,62,101  
 犬塚紋太夫 15  
 岩田七郎兵衛 1,2,7,9,17,34,36,  
 39,51,55,57,61,70,  
 72,75,88,98,99,  
 102,103,104,107  
 上嶋彦兵衛 9,17,39,51,55,57,  
 61,70,72,78,79,88,  
 89,93,99,103,104,  
 107  
 梅原善之助 (介) 23,42,63,65  
 江見清五郎 15  
 遠藤五左衛門 8,35,76  
 近江屋久右衛門 7,34,35,75,76  
 大口助七郎 23,43,63,65,82  
 大森栄次郎 1,2  
 大森善七郎 40,64  
 大森伝右衛門 110  
 岡本定七郎 15  
 小川亦六 68,73,80,81,105,106

尾崎伝蔵 22  
**【か】**  
 梶川甚太夫 54  
 梶田半兵衛 38  
 片山十右衛門 60,70  
 片山弥介 15  
 芋屋与兵衛 66  
 河村寛左衛門 83,85  
 寛彰院 30,39,40,48,62,64  
 木屋市郎右衛門 74  
 倉橋屋勝兵衛 36  
 黒田甲斐守 19  
 鴻池善右衛門 6,7,8,34,35,70,78,  
 90,98,102,108

鴻池善九郎 78,90  
 鴻池善兵衛 6  
 児玉助右衛門 56  
 小山八百二 53  
 近藤忠左衛門 110

### 【さ】

桜井乙之丞 53  
 桜井宇八郎 53,54  
 笹岡紋次郎 31  
 薩州様 4,16,17,31  
 佐藤孫兵衛 1,2,7,8,13,14,30,  
 34,35,38,39,40,51,  
 60,61,64,73,75,76,  
 78,79,81,83,84,86,  
 89,98,99,100,102,  
 104,105,106,107,  
 109  
 佐野屋為之介 66  
 佐谷嘉太夫 20,37  
 嶋屋孫兵衛 11,25

=索引=

番号は史料番号。

《地名》

【あ】

青江村 110  
赤崎村 24  
安治川上 66  
阿津村 11, 49, 74  
網浜 1  
伊里中村 23, 42, 43, 63, 65  
宇治 51  
有年(うね) 41  
大川町 45  
大坂 18, 49, 53, 74  
大坂村 59, 67  
小串村 24, 25

【か】

柿ノ木村 93, 94  
片上村 44, 45  
北方村 88, 93, 94  
京都 26, 40, 48, 62, 66, 91,  
99, 100, 101, 107

古地(こち)村 94

【さ】

塩見町 21  
七郎右衛門町 45  
下津井四ツ浦 111  
宿村 9, 10

【た】

竹田村 110  
橘通 25  
玉村 66  
天満 69

土佐国

22

【な】

長崎 95, 96, 97  
中程村 23, 42, 43, 63, 65  
梨ヶ原 41  
西窪田村 59, 67  
西野地村 22  
野田屋町 21, 24, 77

【は】

馬喰市町 22  
東河原村 110  
東中嶋町 3, 24, 25, 77  
肥後国 23, 43, 63, 65  
日生(ひなせ)浦 82  
伏見 15, 20, 30, 36, 37, 38,  
40, 99, 100

藤原村 55  
二日市町 110

【ま】

砂子(まなご)村 82

三ツ石 41

【や】

八嶋村 33  
安下庄 33